

古志地区土地改良総合事業地内

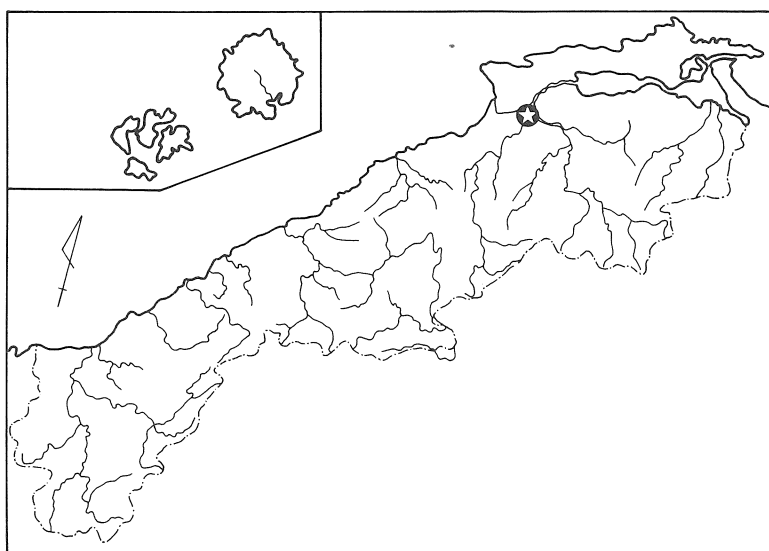
# 古志本郷遺跡発掘調査報告書

1999年3月

出雲市教育委員会

古志地区土地改良総合事業地内

## 古志本郷遺跡発掘調査報告書



古志本郷遺跡の位置

1999年3月

出雲市教育委員会

## はじめに

出雲市教育委員会では、平成7年度に出雲市土地改良区の委託を受け、古志地区土地改良総合事業地内に所在する古志本郷遺跡の発掘調査を実施しました。

当該地は、これまで遺跡の縁辺部にあたる地域と考えられていましたが、数多くの遺構や遺物を検出することができました。これらの資料は、この地域における人々の生活を探るうえで貴重な発見となるとともに、遺跡の範囲がさらに広がる可能性をうかがわせるものです。

本書はその報告書ですが、郷土の歴史をひもとく鍵として広く活用されれば幸いに存じます。最後に、発掘調査にあたりご指導、ご協力いただきました出雲市土地改良区をはじめ、関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成11年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

## 例 言

1. 本書は、出雲市土地改良区の委託を受け、出雲市教育委員会が平成7年度に実施した古志地区土地改良総合事業に伴う古志本郷遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。  
平成7年（1995）4月17日～平成7年（1995）6月20日
3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。  
出雲市古志町2051番地ほか
4. 調査は次の組織で行った。  
平成7年度  
〔調査指導者〕 岩橋 孝典（島根県教育委員会文化課主事）  
〔事務局〕 野津 建一（文化・スポーツ課長）、新宮 雅子（同 課長補佐）  
〔調査員〕 岸 道三（文化・スポーツ課主事）  
平成10年度  
〔調査指導者〕 守岡 正司（島根県教育委員会文化財課主事）  
〔事務局〕 後藤 政司（文化振興課長）、川上 稔（同 課長補佐）  
〔調査員〕 岸 道三（文化振興課副主任主事）
5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。  
SD－溝状遺構、SX－落ち込み状遺構、P－ピット状遺構
6. 本書で使用した方位は磁北を示す。
7. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。
8. 本書記載の遺物実測図及び写真撮影については、岸が大部分を行ったが、一部については遠藤正樹、高橋 智也（文化振興課主事）がこれを行った。
9. 本書の執筆・編集は上記職員の協力を得て、岸が行った。
10. 石器の石材鑑定については、山本 順三（畷田部美術館学芸員）がこれを行った。
11. 調査にあたっては、出雲市土地改良区及び地元の方々から多大な協力を得た。

12. 発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々に御指導・御協力を賜った。

柳浦 俊一（島根県教育委員会文化財課文化財保護主事）、岩橋 孝典（島根県埋蔵文化財調査センター主事）

13. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。

鐘推 蔵吉 佐藤 保信 片山 修 米山 清司 吉川 善美 園山 薫  
高瀬 伸美

14. 遺物整理、報告書作成業務については、次の方々に従事して頂いた。

石川 桂子 荒木恵理子 飯國 陽子 吹野 初子 遠藤 恭子 今岡ひとみ  
鬼村奈津子 赤川 知美 岡野 和栄

# 本文目次

はじめに

例 言

I. 位置と環境 .....	1
II. 調査に至る経緯 .....	3
III. 発掘調査の概要 .....	7
IV. 総 括 .....	3 5
出土遺物観察表 .....	3 6
図 版 .....	図版 1 ~ 図版 1 2

# 挿 図 目 次

## I. 位置と環境

第1図	古志本郷遺跡周辺の遺跡	1
-----	-------------	---

## II. 調査に至る経緯

第2図	試掘トレンチ堆積土柱状図	3
第3図	試掘トレンチ位置図	3
第4図	発掘調査区位置図	5・6

## III. 発掘調査の概要

第5図	S X 0 1 実測図	8
第6図	S X 0 1 遺物出土状況実測図	9
第7図	S X 0 1 出土遺物実測図	10
第8図	S D 0 1 実測図	12
第9図	S D 0 1 遺物出土状況実測図	13
第10図	S D 0 1 出土遺物実測図	14
第11図	0～4 G r 出土遺物実測図	16
第12図	5～10 G r 出土遺物実測図	17
第13図	11～13 G r 出土遺物実測図	19
第14図	14～16 G r 出土遺物実測図(1)	21
第15図	14～16 G r 出土遺物実測図(2)	23
第16図	17 G r 出土遺物実測図	24
第17図	a 18～ a 19セクション図	26
第18図	18 G r 出土遺物実測図	27
第19図	a 19～ a 20セクション図	29
第20図	19 G r 出土遺物実測図	30
第21図	a 20～ a 21セクション図	31
第22図	20 G r 出土遺物実測図	32
第23図	その他の遺物実測図	33

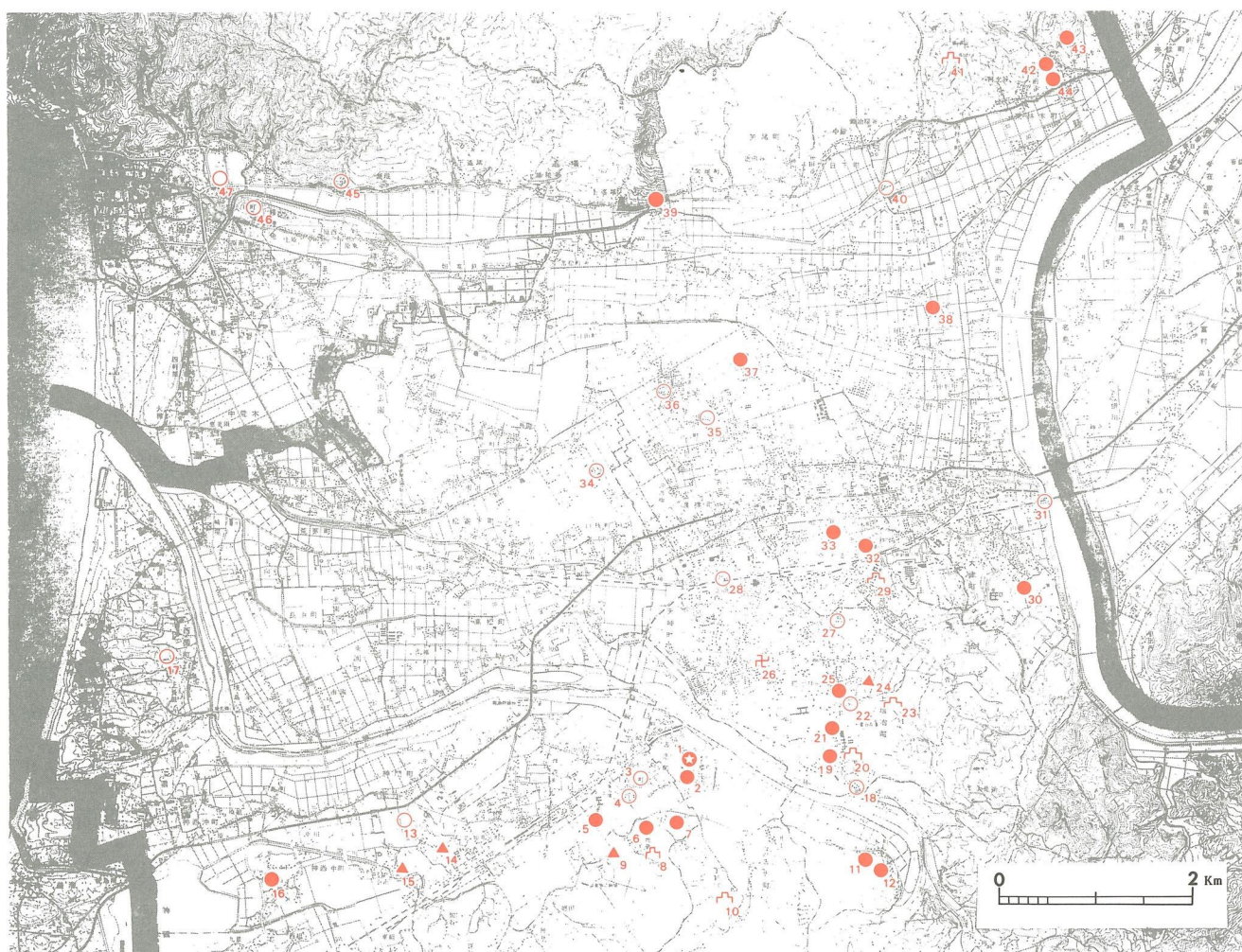
# I. 位置と環境

## (1) 位置

古志本郷遺跡は、出雲市街地から約2 km南西に位置している。神戸川左岸に広がる遺跡内は、現在ではほとんどが宅地として利用され、北側には旧国道が通り、道路に沿って町並が形成されている。

沖積平野には、かつて神戸川によって形成された旧自然堤防があり、弥生時代中期頃より集落が営まれていたことがこれまでの発掘調査によって知られている。

昭和62年の調査<sup>①</sup>では、土器溜のほか竪穴住居跡と考えられる落ち込みや貝層の一部を検出しており、遺跡の保存状態も良好で矢野遺跡や天神遺跡のような大複合集落遺跡であることが明らかになっている。また、平成2年の古志公民館移転改築に伴う調査<sup>②</sup>では、市内ではじめて完全な形の竪穴住



第1図 古志本郷遺跡周辺の遺跡

1. 古志本郷遺跡
2. 大梶古墳
3. 下古志遺跡
4. 田畑遺跡
5. 宝塚古墳
6. 妙蓮寺山古墳
7. 放れ山古墳
8. 浄土寺山城跡
9. 地藏堂横穴墓群
10. 栗栖城跡
11. 刈山古墳群
12. 小坂古墳
13. 知井宮多聞院遺跡
14. 福知寺横穴墓群
15. 小浜山横穴墓群
16. 山地古墳
17. 上長浜貝塚
18. 三田谷遺跡
19. 半分古墳
20. 半分城跡
21. 地藏山古墳
22. 築山遺跡
23. 大井谷城跡
24. 上塩冶横穴墓群
25. 上塩冶築山古墳
26. 神門寺境内廃寺
27. 角田遺跡
28. 天神遺跡
29. 平家丸城跡
30. 西谷墳墓群
31. 斐伊川鉄橋遺跡
32. 今市大念寺古墳
33. 塚山古墳
34. 白枝荒神遺跡
35. 小山遺跡
36. 矢野遺跡
37. 大塚古墳
38. 荻籽古墓
39. 石臼古墳
40. 山持川河岸遺跡
41. 鳶ヶ巣城跡
42. 平林寺山古墳
43. 大寺古墳
44. 膳棚山古墳群
45. 菱根遺跡
46. 原山遺跡
47. 出雲大社境内遺跡



居3棟が検出されるとともに、遺跡内で玉作が行われていた可能性が指摘されている。

さらに、近年の斐伊川放水路事業に伴う発掘調査<sup>③</sup>によって、環濠と考えられる溝状遺構や、神門郡家跡と考えられる大形の掘立柱建物跡なども検出されており、遺跡の規模・範囲がさらに広がる可能性が強い。

## (2) 歴史的環境

付近に所在する弥生時代の遺跡としては、西に下古志遺跡・田畑遺跡がある。下古志遺跡では竪穴住居跡のほか土坑、溝状遺構を多数検出している。中でも大規模な溝状遺構からは多量の遺物が確認されているうえ、集落を圍繞する環濠として機能していた可能性が指摘されている。田畑遺跡<sup>④</sup>では、市内ではじめて竪穴住居跡（弥生時代中期）が検出されたほか、石鋸、石鏃などの石製品や黒曜石、めのうなどが出土し、攻玉を行っていたことが明らかになっている。さらに西方には、神門水海の汀線付近に営まれ、弥生時代から古墳時代にかけての貝塚として良く知られている知井宮多聞院遺跡がある。

古墳時代になると、規模は縮小するものの弥生時代の遺跡に引き続いて集落が営まれるほか、平野部や丘陵地に古墳や横穴墓が築造される。沖積平野の旧自然堤防上には大楯古墳や宝塚古墳、天神原古墳などが築かれている。大楯古墳は、古志本郷遺跡の範囲内に所在し、横穴式石室から金環などが出土している。また、西方に所在している宝塚古墳は、現在では水田面より下位に横穴式石室があるが、築造当時は高燥な旧自然堤防上にあつたと考えられ、石室内には家形石棺が納められ、国指定史跡となっている。天神原遺跡は、出雲高校の西にあつたが現在は消滅している。さらに、南の丘陵地には、持ち送り式の特異な側壁をもち、石床3基を安置した放れ山古墳や横穴式石室に家形石棺を置き、観音開きの石扉をもつ妙蓮寺山古墳がある。また、山腹に穴を穿ち、その中に埋葬した井上横穴墓群や地藏堂横穴墓群なども南の丘陵地に所在している。

奈良時代にも弥生時代から引き続いて集落は営まれ、古志本郷遺跡をはじめ、下古志遺跡などで掘立柱建物跡や井戸などが検出されている。中でも、平成10年度に発掘調査された古志本郷遺跡の北側では、大形の掘立柱建物群が整然とした区画の中に立ち並び、『出雲国風土記』に記載された「神門郡家」が弘法寺付近に所在していたという説を裏付けるものとして注目されている。風土記に記載されているものとしては「宇賀池」の堤跡と考えられる堤防も残っており、かつて観察できた断面は、2種類の異なる土を交互に積み重ねた版築状互層になっており、高度な土木技術で築かれていたことが明らかになっている。また、井上地区には新造院があつたとの説もあるが、定かではない。

中世には市内でも13以上の城館が存在しているが、古志地区には浄土寺山城、栗栖城が築かれている。これらは新宮谷沿いにあり、かつて南の山間部から平野に出る通路にあたる要衝の地を選んでい。これらの城には、郭と呼ばれる平坦地が何段にもわたって作られ、出雲守護職となった塩冶氏の、頼泰の弟の義信が古志氏として城主におさまり、永くこの地を治めている。

## II. 調査に至る経緯

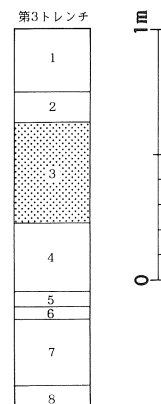
平成6年(1994)5月17日、出雲市土地改良区より古志地区土地改良総合事業予定地における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は、東側が周知の遺跡である古志本郷遺跡の南端部、西側が田畑遺跡の東端部にあたるという位置環境から、試掘調査によって遺跡の有無を確認することとした。

試掘調査は、事業地内の畑地に農作物が栽培されていた都合上、収穫後の平成6年(1994)10月11日に5カ所のトレンチを設定して行った(第3図)。その結果、事業予定地の東側に設定した第1・第2トレンチからは遺物・遺構とも発見されなかったが、その西側に設定した第3～第5トレンチからは土師器・須恵器などの遺物とともに、落ち込み状遺構・ピットなどの遺構が検出された。遺物が発見された各トレンチでの堆積はほぼ一様で、厚さ40cm程度の耕作土の下には暗褐色土が堆積しており、その下層には砂質土・粘質土が互層状に堆積し、地山である灰色砂層に達する。このうち、暗褐色土が遺物包含層である(第2図)。

試掘調査の結果から、事業者である出雲市土地改良区と出雲市教育委員会、島根県教育委員会の三者で協議を重ね、第3トレンチから第5トレンチにかけての全長約110mの区域を発掘調査することで合意した。そして、調査期間は平成7年(1995)4月から同年6月までとすることを確認した。

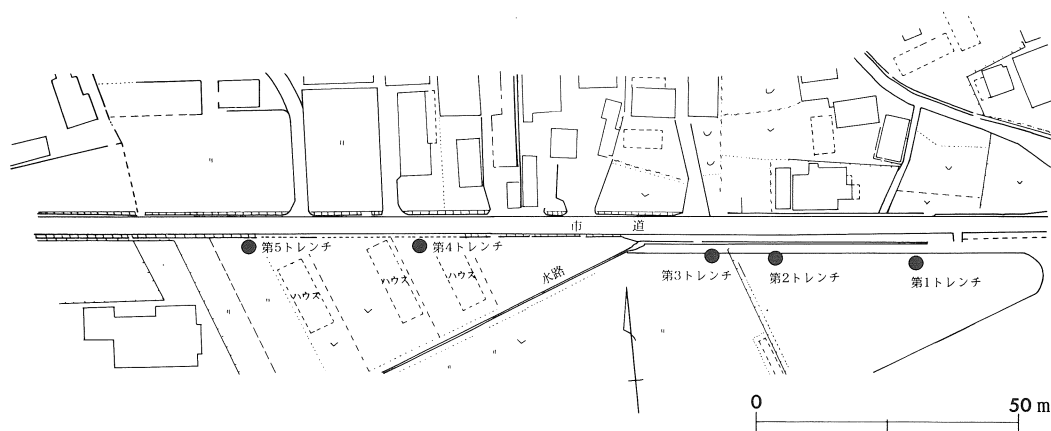
発掘調査に至る手続きについては、まず、事業者である出雲市土地改良区から平成7年(1995)2月10日付で埋蔵文化財発掘調査の届出(文化財保護法第57条の2)が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の通知(同法第98条の2)を同年2月15日付で文化庁長官宛通知している。

発掘調査は、平成7年(1995)4月から準備を進め、4月17日から開始した。なお、調査地の畑地中央には東西に既設用水路が取り付けられていたため、その下面は調査することができなかった。そのため、用水路南側の約2.5m×110mの区間を調査した後、順次北側の約1m×110mの区間を調査していくこととした。



- 1. 暗褐色土 耕作土
- 2. 茶褐色土 造成土
- 3. 暗褐色土 遺物包含層
- 4. 黄褐色砂質土
- 5. 淡黄褐色粘質土
- 6. 淡黄褐色粘質土
- 7. 淡黄褐色粘質土
- 8. 灰色砂層

第2図 試掘トレンチ堆積土柱状図



第3図 試掘トレンチ位置図

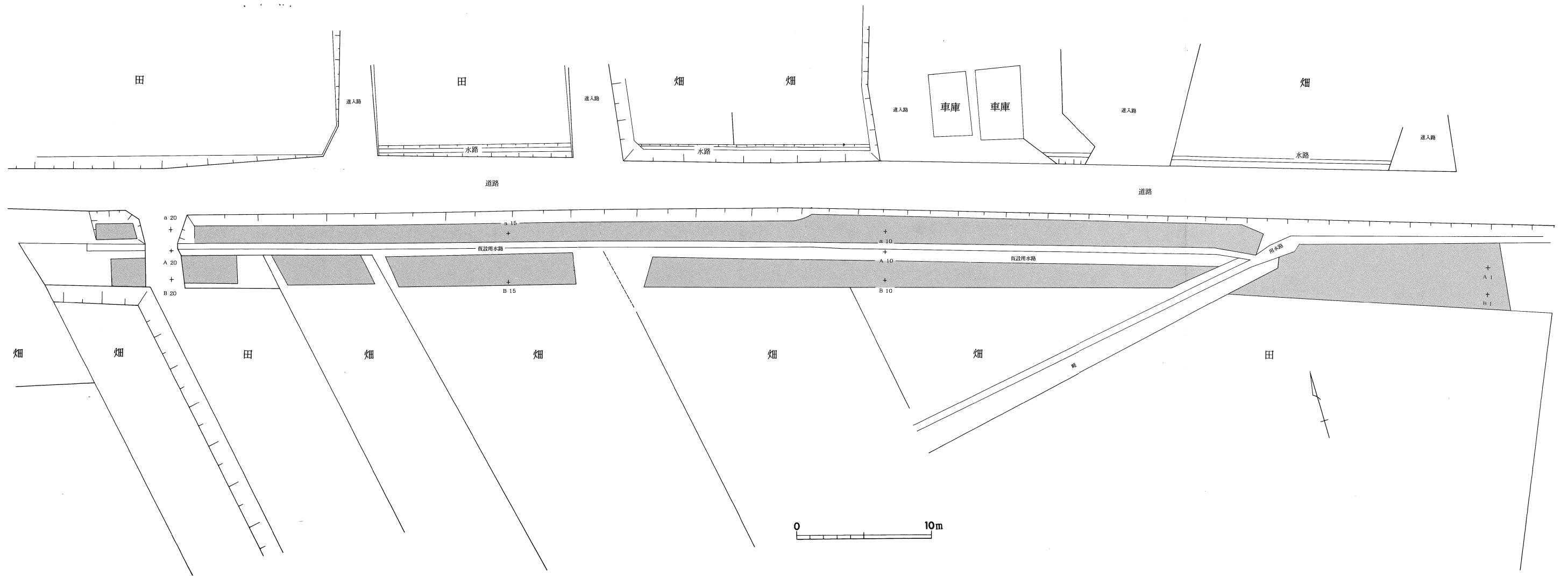
調査面積は、用水路の南側が約2.5m×110mの約275㎡、用水路北側は約1m×110mの110㎡であり、総発掘調査面積は約385㎡である。

調査地は狭小なうえ、水田からの漏水や下層からの湧水など水処理に悩まされながらも、平成7年(1995)6月20日に調査を終了した。

なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届(遺失物法第13条)、埋蔵文化財保管証をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。

#### 註

- (1)「古志地区遺跡分布調査報告書」 出雲市教育委員会 1988年
- (2)「出雲市埋蔵文化財調査報告書第4集」 出雲市教育委員会 1994年
- (3)「古志本郷遺跡発掘調査説明会資料」 島根県教育委員会 1998年
- (4)「神門地区遺跡詳細分布調査報告書」 出雲市教育委員会 1989年



第4図 発掘調査区位置図

### Ⅲ. 発掘調査の概要

#### 1. 調査の概要

調査地の畑地には東西に用水路が取り付けられていたため、便宜上南北に分けてグリッドを設定した。北側は南北1m×5mのグリッドを設定し、東からa0～a20Grとし、南側は南北2.5m×5mのグリッドを設定してそれぞれA0～A20Grとした。そして、東側から順次調査を進めていった。なお、総発掘調査面積は、約385m<sup>2</sup>である。

#### 層 序

調査区が東西に長く、水田と畑地とでは約50cmの標高差があったため、堆積土の状況は調査区内で一様ではない。

東側水田面においては、基本的に上層から耕作土・黄灰色土・灰褐色土・褐灰色土と堆積し、地山である黄褐色砂層に達する。一方、畑地では、基本的に上層から耕作土・造成土・暗褐色土・砂質系土と堆積し、地山である黄褐色砂層に達している。また、地山である黄褐色砂層も調査区を通して一様ではなく、西側ではかなり粗くなっていることが注意される。

#### 遺 構

遺構は調査区が狭小なため、完全な形で検出できたものではなく、遺構であるかどうかの見極めも難しかった。その中であって、比較的広い範囲で調査ができた東側では落ち込み状遺構1（SX01）のほか多数のピットを検出している。そして、畑地西側の14Gr～16Gr、19Grで溝状遺構2（SD01・SD02）を検出しているが、いずれも部分的なものである。また、トレンチの中には、全体が遺構の一部と考えられるグリッドもある。

#### 遺 物

遺物は、地山面の上層に堆積する全ての層が遺物包含層となっており、弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器のほか、土錘や石器・鉄製品なども出土している。なお、水田や畑地の耕作土、造成土中からも遺物が検出されている。

遺物の出土量はコンテナ15箱分に及び、発掘調査面積から考えるとかなり多い。特に、調査区西側での出土量が多く、弥生土器の出土が西側に偏っていることは、弥生時代の遺跡として知られる田畑遺跡<sup>(1)</sup>との位置関係からも注意される。また、遺構内からも多くの遺物が出土しており、SX01からは古墳時代後期から平安時代初期にかけての土師器・須恵器が検出されており、SD01からは古墳時代後期から平安時代にかけての土師器・須恵器が検出されている。

注意される遺物としては、一般的には縄文時代晩期頃まで使用されたと考えられる打製石斧が1点のみであるが検出されている。また、6世紀後半から8世紀前半頃にかけて盛行する竈・甑・土製支脚がSD01付近からセットで出土していることも注目される。

## 2. 遺構と遺物

### SX01 (第5図)

調査区の東側、A0GrからA3Grにかけて、黄褐色砂層（地山）上面で検出した落ち込み状遺構である。南側の大部分が調査区外へ伸び、北側の一部についても調査区外に達していることから全体の形状は判断できないが、現状では東西長約11.75m、深さ約50cmを測る。しかし、形状から推察すると、A0GrからA2Grにかけては東西に溝状を呈しているがA2Grの西側では南に向かって曲がって伸びていくようである。なお、検出高は標高約9.60mである。

覆土には、上層から砂利を多く含む褐灰色土・黒褐色土・褐灰色砂質土と堆積しており、地山であるやや粗い黄褐色砂層に達し、この層位からはかなりの湧水がある。なお、黒褐色土は遺構の東側のみに堆積している。断面の形状は、全体が把握できないが肩部からは約45度の角度で底面に向かって落ている。

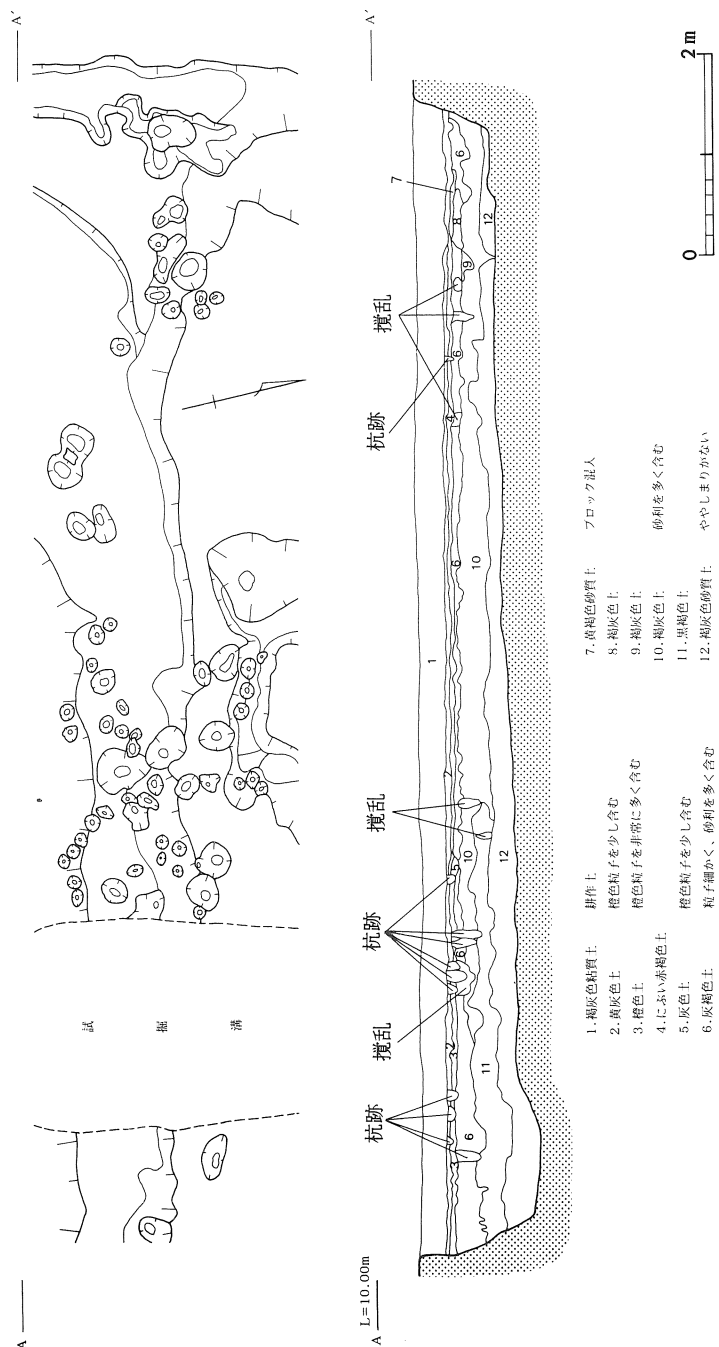
遺物の出土状況（第6図）をみると、位置的にはほぼ平均して出土しており、層位的には中層（褐灰色土・黒褐色土）からの出土量が多い。

遺構の性格については、部分的な検出であるために判断し難い。しかし、遺構が築かれた時期については、出土遺物からみると古墳時代後期の遺物も若干混入してはいるものの、およそ8世紀代に築かれ、平安時代初期頃まで機能していたと考えられる。

### SX01の出土遺物 (第7図)

出土している遺物には、土師器甕・坏・坏蓋・高台付坏・須恵器鉢・高台付坏・坏蓋・皿・高坏・甗などがある。その中にはほぼ完形の状態で出土し、全体の形状が把握できるものもあり、良好な資料となっている。

第7図-1～5は、土師器の甕である。1は、口縁部は外方にゆるく屈折し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。口縁部内外面は横方向のハケ、頸部下外面は縦・斜め方向のハ



第5図 SX01実測図

ケによって調整され、内面はケズリによる調整が行われている。2は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。なお、口縁部内面にはススが付着している。3も形態的にはほぼ同様であるが、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。4は、頸部から口縁部にかけて鋭く屈折し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部内外面はナデによる調整が行われ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによって調整されている。なお、外面にはススが付着している。5は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。

以上のような甕については、この時期の土師器編年が確立されていないため、時期的判断はし難い。しかし、SX01から出土している須恵器から考えると、おおよそ8世紀前半頃のものと考えられる。このうち、1のように口縁部がやや長く、外方に比較的ゆるく屈折するものはやや新しい様相を示し、4のように口縁部が鋭く屈折するものはやや古い様相を示すものと考えられる。

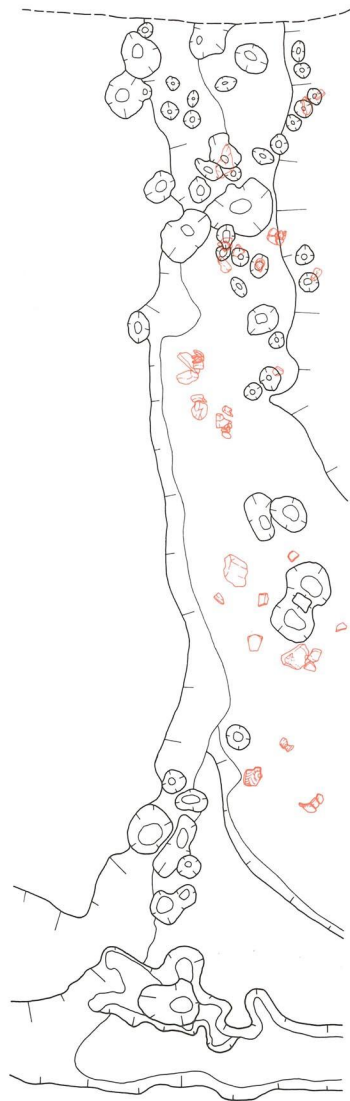
第7図-6は、土師器の高台付坏である。高台部は約3cmと長く、やや外傾して端部はほぼ平坦におさめている。坏部全体の形状は判断できないが、現状から推察するとかなり開くものと考えられる。また、内外面とも朱塗りされており、非常に丁寧な仕上がりとなっている。時期的には8世紀代のものであろう。

7は、土師器坏蓋である。内外面ともナデによる調整が行われ、上部につまみが付くタイプのもので、貼付けた痕跡が残っている。また、内外面ともに朱塗りされている。

8は、土師器高坏である。坏部は深く、内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われ、朱塗りされている。

9は、須恵器鉢である。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。その特徴から、8世紀以降のものであろう。

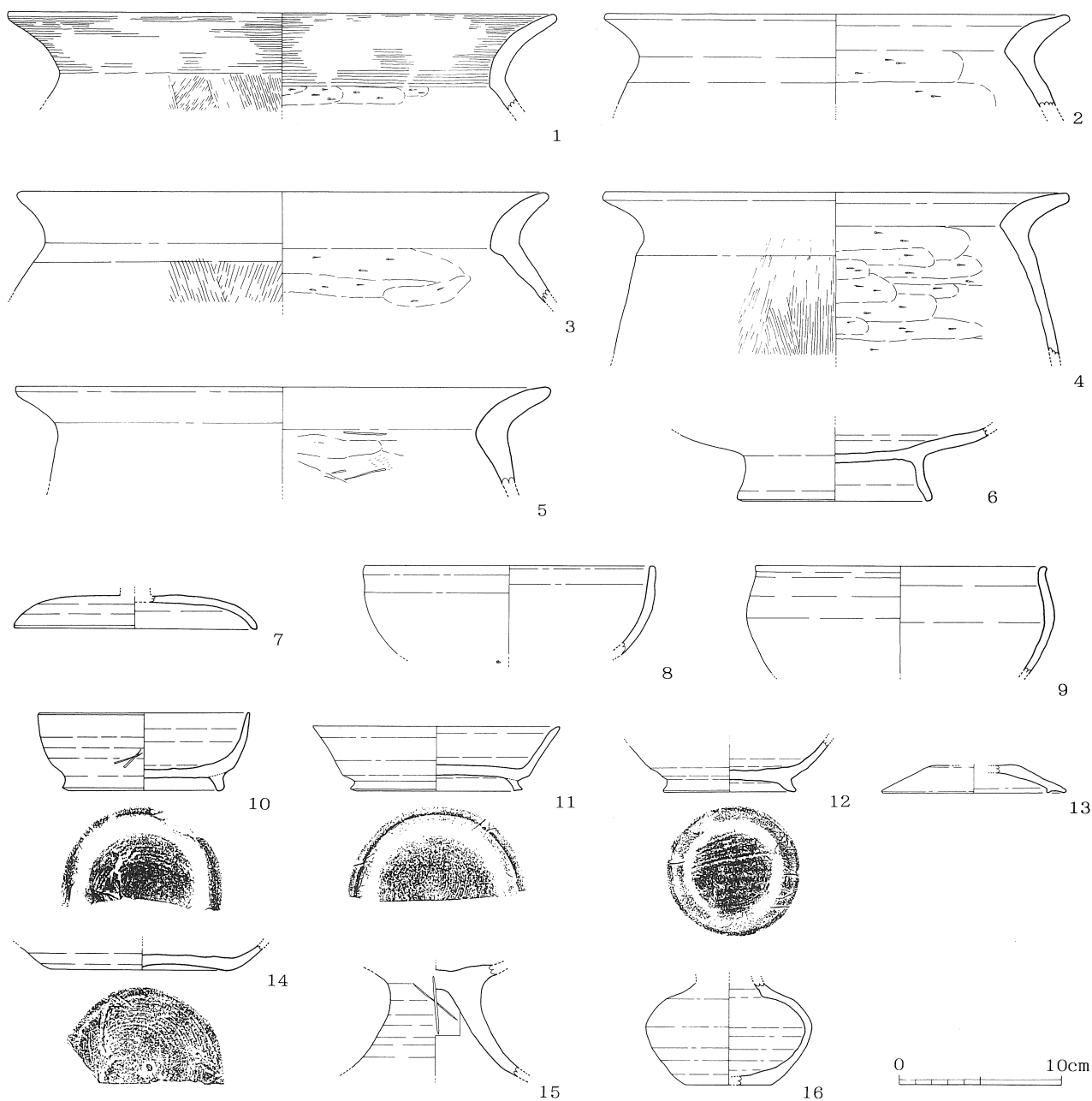
10~12は、須恵器の高台付坏である。10は、坏部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。高台部はやや外傾し、端部はやや丸みを帯びておさめている。



第6図 SX01遺物出土状況実測図

内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りによって切り離されている。また、外面体部にはヘラ状工具によって「×」印が刻まれている。11は、底部から口縁部にかけて直線的に逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。高台部は短く外傾し、ほぼ平坦におさめている。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りによって切り離されている。12は、高台部は短く外傾し、端部は丸くおさめている。内外面は回転ナデ、底部は静止糸切りによって切り離されている。なお、坏部の内面にはヘラ状工具によって浅く「×」印が刻まれている。

以上のような高台をもつ須恵器坏は、8世紀以降に出現する器形であるが、高台部や立ち上がりの特徴から、10・12については8世紀代、11は9世紀前半のものであろう。



第7図 SX01出土遺物実測図



第7図-13は須恵器坏蓋である。口縁内面には短く内傾するかえりが付き、内面は回転ナデによる調整が行われ、外面上部はヘラケズリによる調整が行われている。高広編年<sup>⑩</sup>ではⅡB～ⅢA期に相当する資料と考えられ、7世紀中葉頃のものであろう。

14は、須恵器坏である。底径11.0cmを測り、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

15は、須恵器高坏である。内外面とも回転ナデによって調整され、2ヶ所にヘラ状工具によってわずかに完通する切り込み状の透しが認められる。また、透し孔の1ヶ所にはヘラ状工具によって「\」印が刻まれている。このような高坏は高広編年ⅡA期以降に出現するものであり、7世紀以降のものであろう。

16は、須恵器の壺あるいは甗であろう。底部は平底であるが、切り離し後ナデによる調整が行われている。体部は球形に張り出し、内外面とも回転ナデによって調整されている。

以上のように、SX01から出土している遺物には時期的な幅があり、一概に機能していた時期について判断することは難しい。古いものでは13・15のように7世紀代の遺物もあれば、11のように9世紀代前半の遺物も認められている。しかしながら、この他は総じて8世紀代の遺物と考えられ、遺構が築かれた時期も当該期と考えるのが妥当であろう。

#### SD01 (第8図)

調査区やや西側、A14～A16Grにかけて黄褐色砂層上面で検出した東西方向に伸びる溝状遺構である。東西ともにさらに伸びるものと推測されるが、A13Grでは攪乱により検出できず、A17Gr付近には東南東-西北西方向に伸びる旧河道があったと推測されることから検出できなかった。そのため、全体の形状は判断できないが、現状では東西長13.2m以上、最大幅2.5m以上、最深部までの深さは約40cmを測る。調査区が狭小なため、遺構の覆土の状況が判断しづらい状況であり、部分的な観察しかできなかったが、東側と西側では若干堆積土が異なっている。東側では上層ににぶい黄色土が堆積し、下層には、褐色土、褐灰色砂質土が堆積して、地山である黄褐色砂層に達する。一方、西側では、上層には橙色粒子を含む茶褐色土が堆積し、下層には黒褐色土が堆積している。

遺物の出土状況(第9図)をみると、位置的にはほぼ平均して遺物が認められているが、層位的には上層からの出土量が多く、中層・下層からは比較的少ない状況であった。

遺構の性格については、部分的な検出であるために判断し難いが、西側には南北方向に旧河道があったと推測されることから、灌漑用水路のような機能を果していた可能性もあろう。遺構が築かれた時期については、出土遺物から考えると若干前後するものもあるが、下層から出土しているものには、8世紀中葉頃のものが多く認められていることから、当該期に築かれた可能性が強いのではないだろうか。

SD01の出土遺物 (第10図)

出土遺物には、土師器甕・甑・皿・須恵器甕・壺・坏蓋・坏・高台付坏・皿・高坏のほか、土錘や土製支脚などがある。

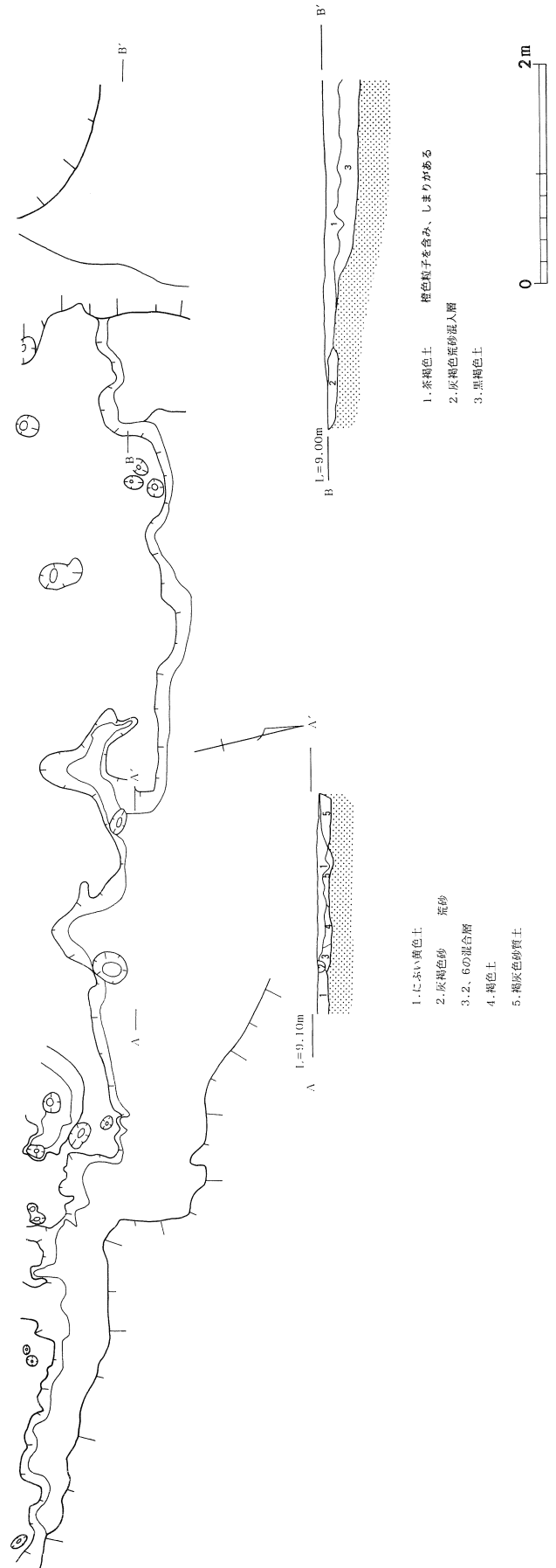
第10図-1は、土師器甕である。頸部から口縁部にかけて比較的ゆるく屈折し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。

2は、土師器の甑である。下端部には穿孔が1ヶ所に認められ、外面は縦方向のやや粗いハケ、内面はケズリによる調整が行われている。また、頸部と口縁部には明瞭な境をもち、外方にゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。出雲市内でも三田谷I遺跡<sup>③</sup>から当該期の甑が出土しているが、このような口縁部の特徴をもつものは出雲地域ではあまり類例がない。

3は、土製支脚である。外面は強いナデによって調整され、内面はケズリによる調整が行われている。また、外面には指頭圧痕が明瞭に認められている。

2・3の甑や土製支脚は、移動式竈とともにセットで認められるものである。時期的には6世紀後半から8世紀前半頃に盛行するものであることから、当該期の遺物と考えられる。なお、2点ともSD01上層からの出土であることは注意される。

4は、土師器皿であろう。内外面とも回転ナデによって調整されているが、底部はほぼ静止した状態で糸切りによ



第8図 SD01実測図

り切り離されている。また、底部と体部には明瞭な境界をもたない。形状的には9世紀前半頃のものであろう。なお、内外面ともに朱塗りされているが、出雲平野で一般的にみられる朱とは異なり、暗赤褐色を呈している。成分の違いであろうが、このような朱は頓原町など出雲山間部でよくみられるものである。

第10図-5は、管状土錘である。ほぼ完形で、最大長4.5cm、最大幅1.6cm、重さ11gを測る。なお、土錘の形状からは時期的判断は難しい。

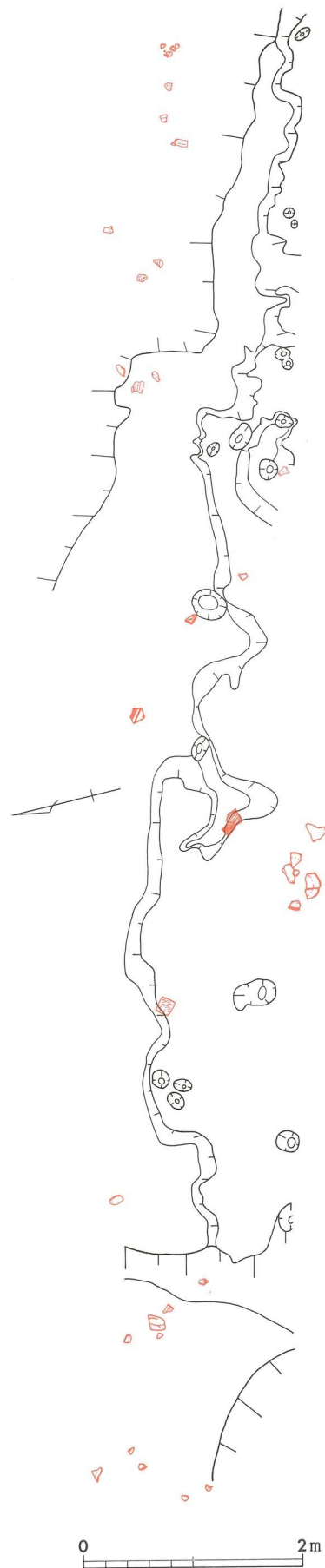
6・8は、須恵器坏蓋である。6は、宝珠状のつまみをもち、口縁内面にはかえりがなく、口縁部上端の断面は三角形を呈している。内外面とも回転ナデによって調整され、上部はヘラ切りにより切り離されている。このように器高が低く、口縁部が平坦化するタイプのもは、高広編年Ⅳ期に相当する資料と考えられ、8世紀中葉以降のものであろう。8は、内外面とも回転ナデによって調整され、外面上部はヘラ切りにより切り離されている。口縁端部は短く直立し、上部には宝珠状のつまみをもつものと考えられる。7と同様に8世紀中葉以降のものであろう。

7は、須恵器坏蓋である。口縁部に短く内傾するかえりもち、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。高広編年ⅡA期に相当する資料と考えられ、7世紀初頭から前葉にかけてのものであろう。

9・12は須恵器の甕である。9は、口縁部外面に段をもち、稜をなしている。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、口縁部外面には自然釉がかかっている。12は大形の甕の口縁部と考えられ、外面には2条の凹線文を2段に施し、その間を波状文で飾っている。6世紀末から7世紀初頭頃のものであろうか。

10は、須恵器壺である。底径5.7cmを測り、底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がる。内外面は回転ナデ、底部はヘラ切りによって切り離されている。また、内面には漆の付着が認められることから、漆壺として利用されていたものであろう。時期的には9世紀代の資料と考えられる。

11・13・14は、須恵器高台付坏である。11は、高台部は短く直立し、断面は四角形を呈している。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。13は、底径15.9cmと大きく、高台部は短く直立して断面は四角形を呈している。



第9図 S D O 1 遺物出土状況実測図

内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切りによって切り離されている。14も形態的にはほぼ同様である。以上のような坏は、その特徴から8世紀末から9世紀初頭頃にかけての資料であろう。

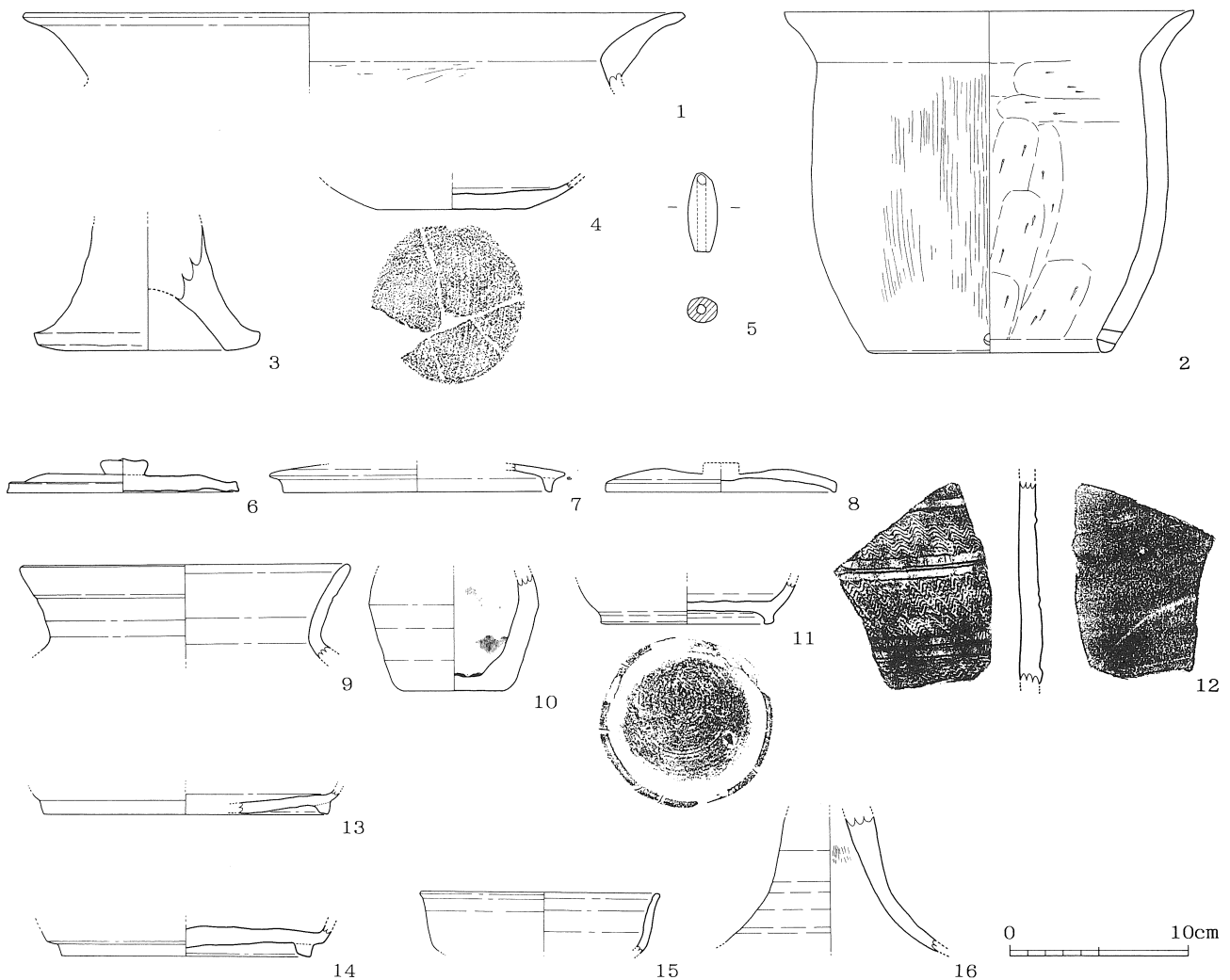
第10図-15は、須恵器坏である。底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、高広編年ではIV A期頃の資料と考えられ、8世紀中葉頃のものであろう。

16は、須恵器高坏であろう。裾部はかなり末広がりになるものと考えられ、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。古墳時代後期の遺物であろう。

以上のようにSD01からは多くの遺物が出土しているが、時期的には古墳時代後期から平安時代前半にかけてのものである。しかし、そのほとんどが8世紀中葉以降のものであることから、遺構が築かれた時期についても、当該期と考えるのが妥当であろう。

### その他の遺構

調査によって検出されたその他の遺構としては、A0GrからA4Grにかけて灰褐色土上面で検出したピット群がある。この中には径20cm~50cmのものまで様々なものがあるが、掘立柱建物跡と考



第10図 SD01出土遺物実測図

えられるような配置は認められず、遺物も全く出土していない。しかし、8世紀代に築かれたと考えられるSX01上面での検出であることから、少なくともそれ以降に築かれたことが明らかである。

また、A19Grの黄褐色砂層（地山）上面では、部分的ではあるが東南東－西北西方向に伸びる溝状遺構を1（SD02）検出している。なお、17Gr～18Grにかけては大きく攪乱を受けているとともに湧水がひどく、明確には検出することができなかったが、下層には粘質土が堆積していることから旧河道と考えられ、SD02はその西側肩部にあたる可能性もある。

### 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物には弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器のほか土製品・石器・鉄製品などがあり、器種的にもバラエティーに富んでいる。調査区が狭小なうえ、畑地については調査が水路によって南北に分断され、遺構が検出しづらい状況であったことから、この中には17Gr～19Grにかけての出土遺物のように、実際には遺構に伴うものと考えられるものもある。

### 0～4Grにかけての出土遺物（第11図）

第11図－1は、土師器甕である。頸部から口縁部にかけて短く「く」の字状に屈折し、口縁部は内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。2は、土師器の鉢であろう。口縁端部にはフラットな面を作り、内外面ともナデ、内面口縁部から2cmほど下位には縦方向のハケによる調整が認められる。3は、土師器甕である。頸部から口縁部にかけてやや長めに外反し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。その特徴から1・3は古墳時代後期以降、2は12世紀代のものであろうか。

4～7は土師器坏で、いずれもA4Grから出土したものである。4は器壁が薄く、底部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。5はほぼ完形で、底径6.1cm、口径12.4cm、器高3.9cmを測る。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離され、外面にはススが付着している。6もほぼ完形で、底径6.4cm、口径12.0cm、器高4.1cmを測る。内外面は回転ナデによって調整され、底部は糸切り後、ナデで糸切り痕を消している。4～6は、形状的に非常によく似ており、その特徴から、9世紀から10世紀代にかけての資料であろう。7は、底部から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上がる。底部付近の破片であるため、時期的判断はできないが、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。

8は土師器の小皿で、底径5.4cm、口径8.0cm、器高2.0cmを測る。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。9は、足高高台をもつ土師器坏である。高台部はやや短く外傾し、端部は丸くおさめている。以上のような小皿、足高高台をもつ坏は、その出現が11世紀後半頃と考えられていることから、それ以降のものであろう。

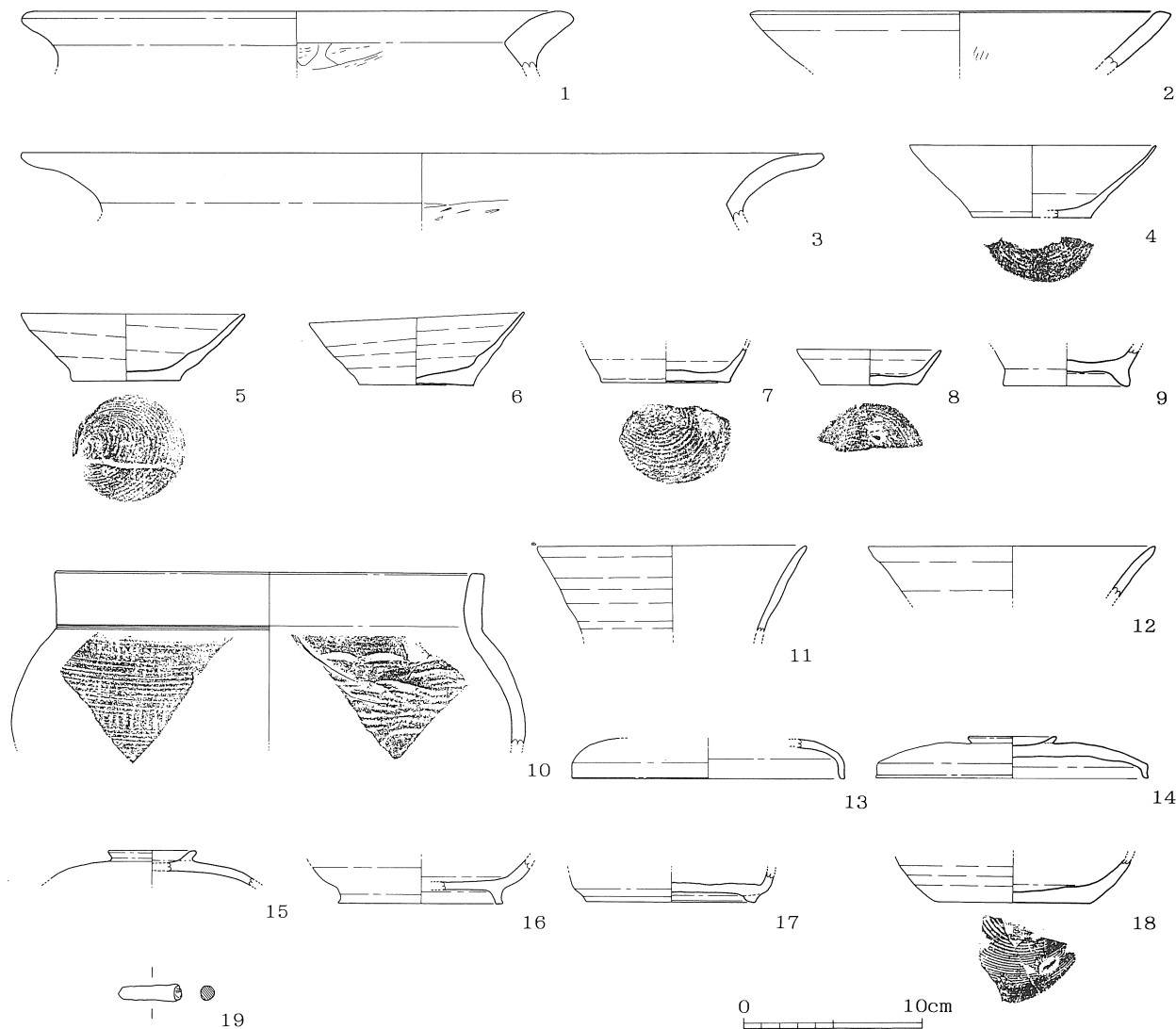
10は、須恵器壺である。頸部から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上がり、口縁端部には平坦面を作り出している。頸部下外面はタタキの後、カキメによってタタキ痕を消し、外面は帯状のタタキによ

る調整が行われている。その特徴から、9世紀代の資料であろう。

第11図-11・12は、須恵器坏であろう。11は、底部から口縁部にかけてやや外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。12も形態的にはほぼ同様であるが、これらの破片からは時期的判断は難しい。

13~15は、須恵器坏蓋である。13は口縁部にはかえりをもたず、やや長めに直立して、端部は丸くおさめている。14は、口縁部が短く直立して上部に輪状のつまみをもつもので、外面には自然釉がかかっている。15も輪状のつまみをもつもので、外面には自然釉がかかっている。いずれも高広編年ⅢB期に相当する資料と考えられ、7世紀末から8世紀前葉にかけてのものであろう。

16・17は、高台をもつ須恵器坏である。16は、高台部はやや外傾し、端部断面は四角形を呈している。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りによって切り離されている。17は、短く直立する高台部をもち、底部から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上がっている。なお、底部はヘラ切りによって切り離されている。全体の形状は把握できないが、いずれも7世紀末以降のものであろう。



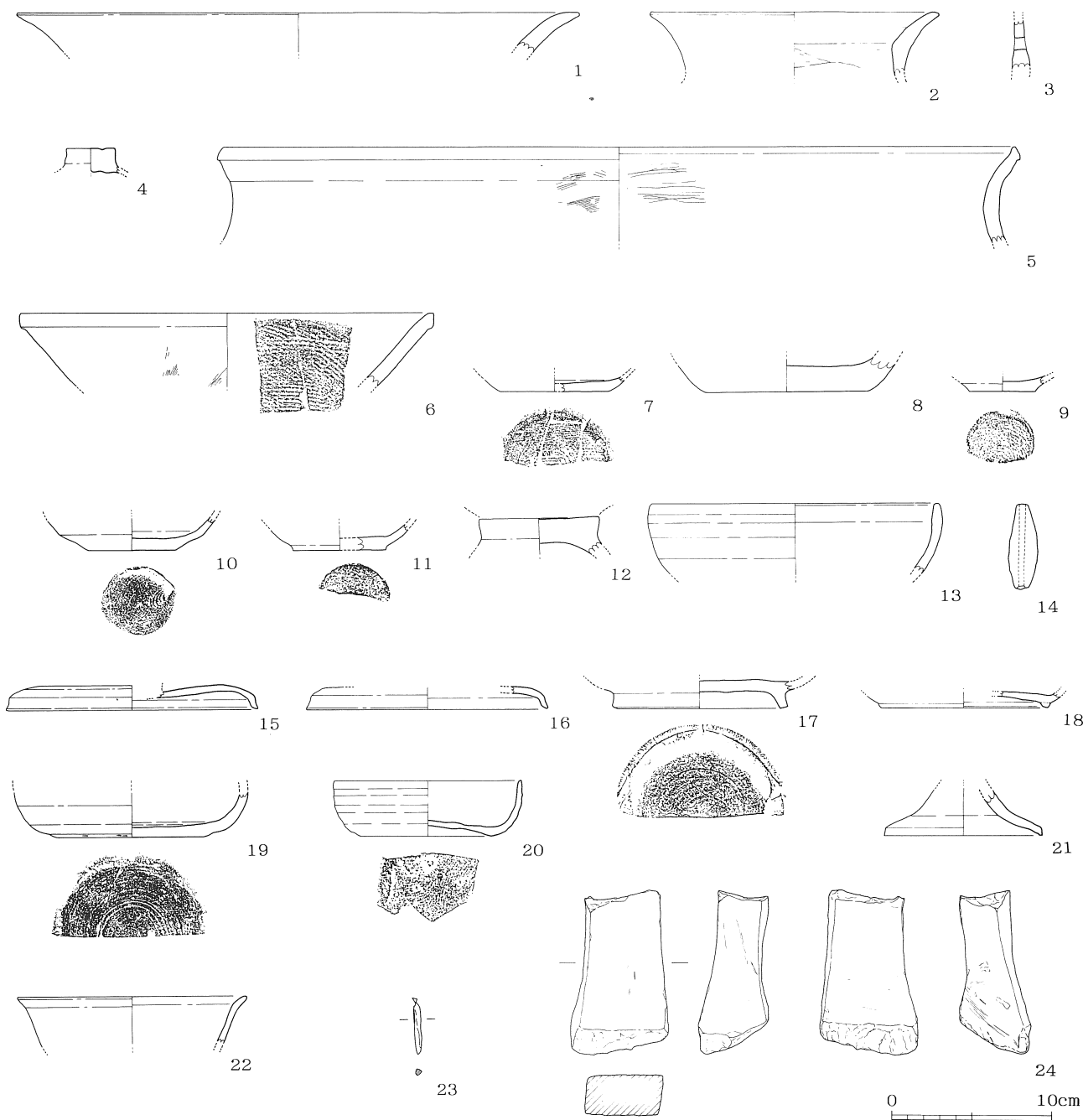
第11図 0~4Gr出土遺物実測図

第11図-18は、須恵器坏である。底部と体部には明瞭な境界をもたず、口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がっている。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りによって切り離されている。8世紀中葉以降の遺物であろう。

19は、用途不明の鉄製品である。錆化して片端は欠損しているが、現状では最大長3.5cm、最大幅1.0cmを測る。断面は円形を呈しており、鉄釘のようなものが想定される。

### 5～10Gr にかけての出土遺物 (第12図)

5～10Grは現状が畑地であったが、地山である黄褐色砂層上面に堆積する全ての層から遺物が確認されている。なお、この区間では明確な遺構は検出されていない。



第12図 5～10Gr 出土遺物実測図

第12図-1・2は土師器甕である。1は、口縁端部がやや外反して丸くおさめている。2は、頸部から口縁部にかけてゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部は外反して丸くおさめている。頸部下内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。いずれも古墳時代後期以降のものであろう。

3は、土師器甕の下端部付近の破片であらう。径7mmほどの穿孔が認められる。なお、甕は前述したSD01内からも出土している。4は、土師器坏蓋のつまみ部であらう。ナデによる調整が行われている。

5・6は、瓦質土器である。5は、壺であらうか。頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方に拡張して平坦面を作り出している。外面はナデと一部にハケ、内面は横方向のハケによる調整が行われている。6は、鉢であらう。口縁端部は外面に玉縁状の突帯をもち、稜をなしている。外面はナデと一部にハケ、内面は横・斜め方向のハケによって調整されている。いずれも12世紀以降によくみられるものである。

第12図-7・9~11は、土師器坏である。7は、内外面とも朱塗りされ、底部はほぼ静止した状態で糸切りにより切り離されている。9は、底径が4.2cmと小さく、小皿の可能性もある。底部は回転糸切りによって切り離されている。10は、底部から体部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がる。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りによって切り離されている。11も形態的にはほぼ同様である。

8は、土師器播鉢である。内面底部付近には約5mm間隔の播目が認められる。このような播鉢は、出雲市藤ヶ森遺跡I地点<sup>(4)</sup>、矢野遺跡第2地点<sup>(6)</sup>からも出土しており、13世紀頃のものと考えられる。

12は、足高高台をもつ土師器坏である。11世紀後半頃に出現する器形であることから、それ以降のものであろう。14は、完形の管状土錘である。長さ4.85cm、径2.4cmを測る。

13・19・20は須恵器坏である。13は、口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。19は、底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、底部と体部との境界は明瞭ではない。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りによって切り離されている。20は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。内外面は回転ナデによる調整が行われているが、底部には回転糸切り痕が2度ある。以上のような坏は、高広編年IVA期に相当する資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。

15・16は須恵器坏蓋である。いずれも口縁部は直立し、端部はやや外反して丸くおさめている。高広編年III B期に相当する資料と考えられ、7世紀末から8世紀前葉にかけてのものであろう。

17・18は、高台をもつ須恵器坏である。17は、高台部はやや外傾して端部断面は四角形を呈している。底部は回転糸切りにより切り離されている。18は、高台部は短く直立して端部断面は四角形を呈している。なお、底部はヘラ切りによって切り離されている。いずれも、8世紀中葉以降のものであろう。

21は、須恵器高坏の脚部であり、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。

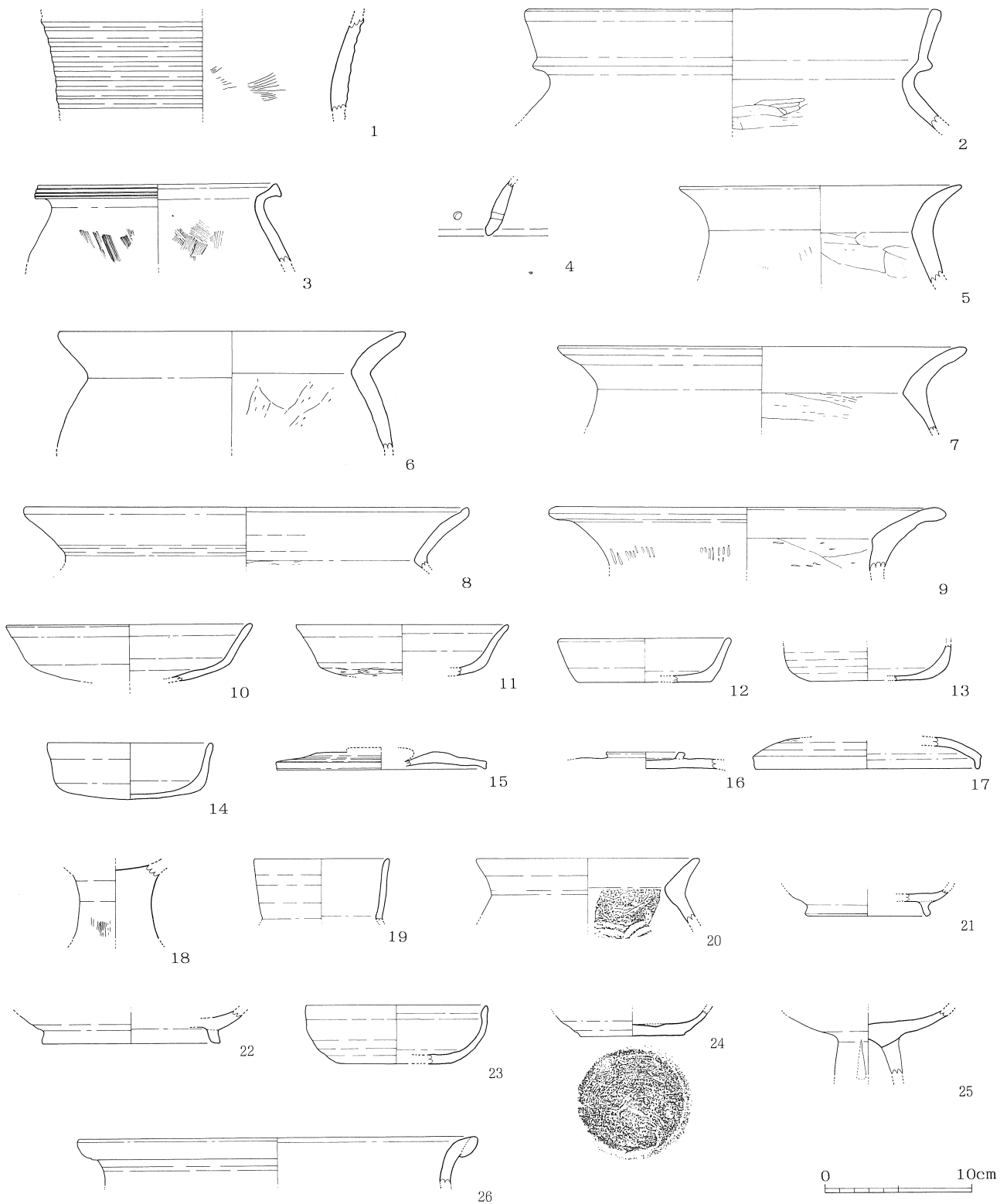
22は、青磁碗である。口縁端部は外反し、丸くおさめている。23は完形ではあるが、用途不明の鉄製品である。長さ3.6cm、径4mmを測り、片端は尖っている。24は、砥石である。両端が欠損してい



るが、3面に使用痕が認められる。石材には石英安山岩質凝灰岩を用いている。

### 11~13Gr にかけての出土遺物 (第13図)

11~13Gr では明確な遺構は検出できなかったが、地山上面に堆積している層は安定した遺物包含



第13図 11~13Gr 出土遺物実測図

層となっており、多くの遺物を検出している。

第13図-1は、弥生土器壺の頸部である。外面には10条以上の三角形文帯を貼付け、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。松本編年<sup>6</sup>Ⅲ-2～Ⅳ-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉から後葉にかけてのものであろう。2は複合口縁をもつ古式土師器甕である。器壁は厚く、口縁端部をやや外方に折り曲げて平坦面を作り出している。口縁部は内外面ともナデ、頸部下内面のやや下方からはケズリによる調整が行われている。草田編年<sup>7</sup>では7期に相当する資料であり、古墳時代前期のものであろう。3は、弥生土器の甕である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は上下に拡張して平坦面を作り出している。口縁拡張部には3条の凹線文を施し、頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。松本編年Ⅳ-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉頃のものであろう。

4は、土師器甕であろう。径5mmの穿孔が認められ、内外面ともナデによる調整が行われている。6世紀後半以降のものであろう。

5～9は、土師器甕である。5は、頸部から口縁部にかけてゆるく屈折し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。6は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。7も形態的にはほぼ同様であるが、外面にはススが付着している。8は、頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁端部は内側に折り曲げて丸くおさめている。また、口縁部の中ほどにはわずかに段を有し、稜をなしている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。9は、頸部から口縁部にかけて強く外方に屈折し、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。外面頸部は縦方向のハケ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。以上のような甕は、8がやや古い様相を示すものと思われるが、その他は古墳時代後期以降のものであろう。

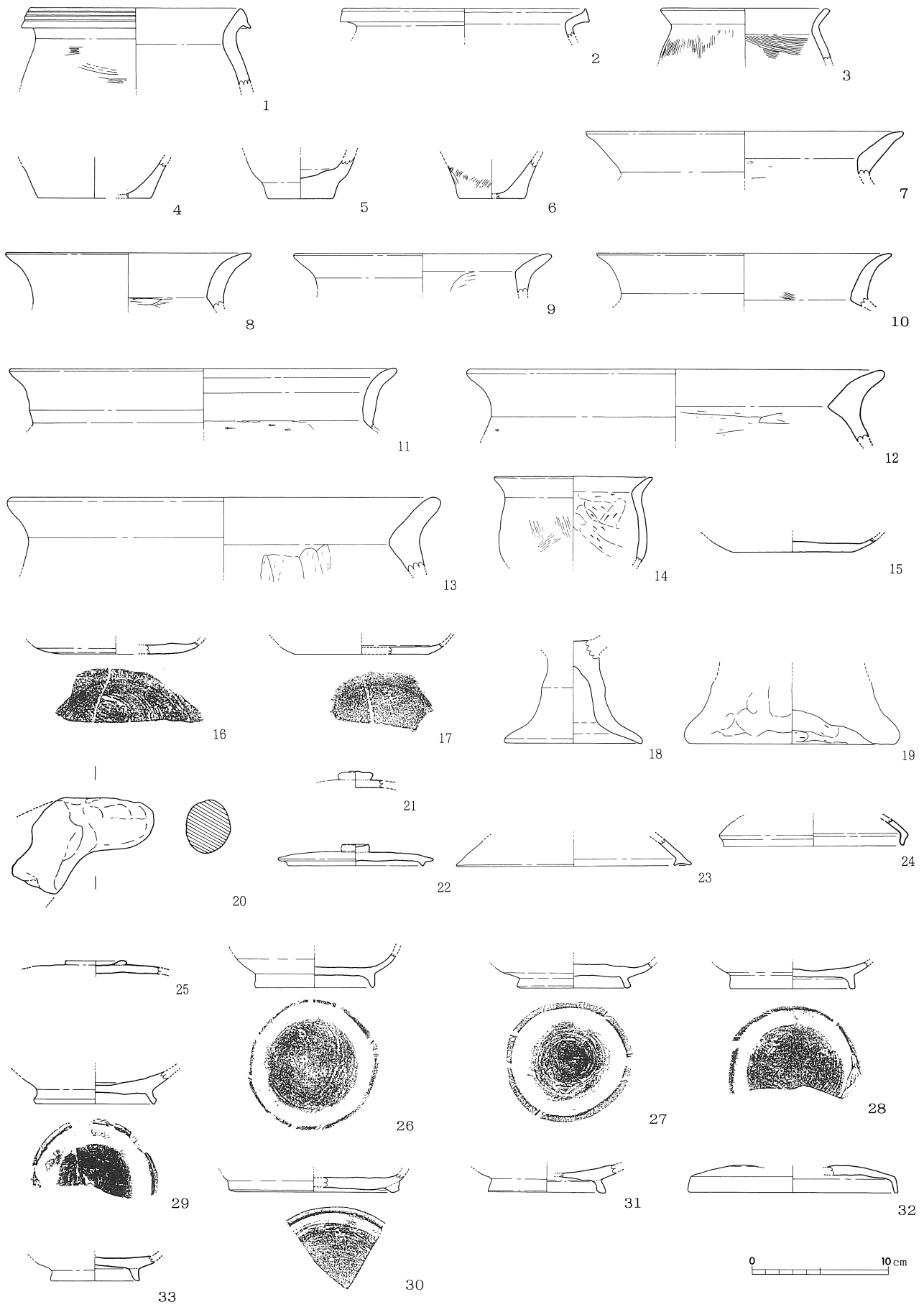
10・11は、土師器高坏の坏部である。いずれも内外面はナデ、外面下方はケズリによる調整が行われ、内外面ともに朱塗りされている。

12～14は、土師器坏である。いずれも底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも朱塗りされ、回転ナデによる調整が行われている。なお、底部はヘラ切りによって切り離されているようである。10～14については、その特徴から古墳時代後期以降のものであろう。

15～17は、須恵器坏蓋である。15は、口縁部が短く直立し、端部はやや外反して丸くおさめている。16は輪状のつまみが付くものである。17は、15と形態的にはほぼ同様である。以上のような坏蓋は、高広編年ⅢB期に相当する資料と考えられ、7世紀末以降のものであろう。

18は、土師器高坏の脚部である。外面と坏部内面は朱塗りされ、脚部外面の一部には縦方向のハケによる調整が行われている。古墳時代後期頃のものであろう。

19は、須恵器壺の口縁部であろう。頸部から口縁部にかけて直立して立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。20は、須恵器甕である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、頸部下内面はタタキによる調整が行われている。



第14图 14~16G r 出土遺物実測図(1)

第13図-21・22は、高台を持つ須恵器坏である。いずれも高台部はやや外傾し、端部断面はほぼ四角形を呈している。23・24は、須恵器坏である。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。24は、全体の形状は把握できないが、底部は回転糸切りによって切り離されている。21～23については、高広編年ⅣA期頃に相当する資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。

25は、須恵器高坏である。対応する2ヶ所に透し孔が認められる。

26は、陶器の鉢であろう。口縁部外面に突帯を貼付けている。近世の遺物と考えられる。

#### 14～16Gr にかけての出土遺物 (第14図・第15図)

14～16Gr にかけては、8世紀中葉頃に築かれたと考えられる溝状遺構(SD01)を検出しているが、その上面の包含層と狭小で遺構が検出できない状態であった調査区北側からも多くの遺物を検出している。

第14図-1～3は、弥生土器の甕である。1は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部は下垂して拡張部には3条の凹線文が施されている。頸部下外面は横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。2は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張して平坦面を作り出しているが、無文である。3は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折して口縁端部は拡張せず、平坦に作り出している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面にはススが付着している。1・2は弥生時代中期後葉から後期にかけて、3は弥生時代中期中葉のものであろう。

4～6は、弥生土器の壺あるいは甕の底部付近の破片である。いずれも小片であるが、5・6は底径が小さくなるという特徴から、弥生時代後期頃のものであろう。

7～14は、土師器甕である。7は、頸部から口縁部にかけて外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。8も形態的にはほぼ同様である。9は、頸部から口縁部にかけて短く外方に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。10は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部は外反して丸くおさめている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。11は、頸部から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。12は器壁が厚く、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。13は器壁が厚く、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。また、頸部下内面は縦方向のケズリによる調整が行われている。このように頸部下内面が縦方向のケズリによって調整されるものは、移動式竈によくみられるもので、竈である可能性もある。14は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。頸部下外面は縦・斜め方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような甕は、この時期の土師器編年が確立されていないために詳しくはわからないが、「く」の字状に屈折する口縁部をもつものは古墳時代後期頃、口縁部が比較的ゆるく屈折するものはやや後出するものではないだろうか。

第14図-15~17は、土師器坏あるいは皿である。15は、底部と体部の間に明瞭な境をもたず、内外面はナデ、底部はヘラ切りによって切り離されている。16・17は、底部が回転糸切りにより切り離れている。いずれも内外面とも朱塗りされ、器高が低くなるものと考えられ、8世紀後半以降のものであろう。

18は、土師器高坏である。内外面ともナデによる調整が行われ、朱塗りされている。

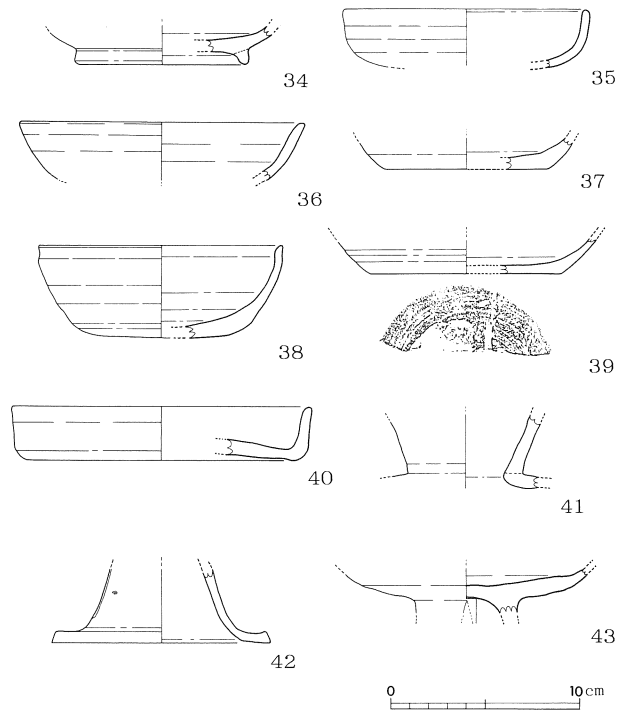
19・20は、土製支脚である。19は脚部付近の破片で、底部には凹みを持ち、ケズリによって調整され、外面は全体に強いナデによる調整が行われ、指頭圧痕が明瞭に残っている。20は突起部の破片で、

ナデによる調整が行われている。土製支脚は、竈・甑とともに6世紀後半から8世紀前半頃にかけて盛行するものであることから、当該期のものであろう。

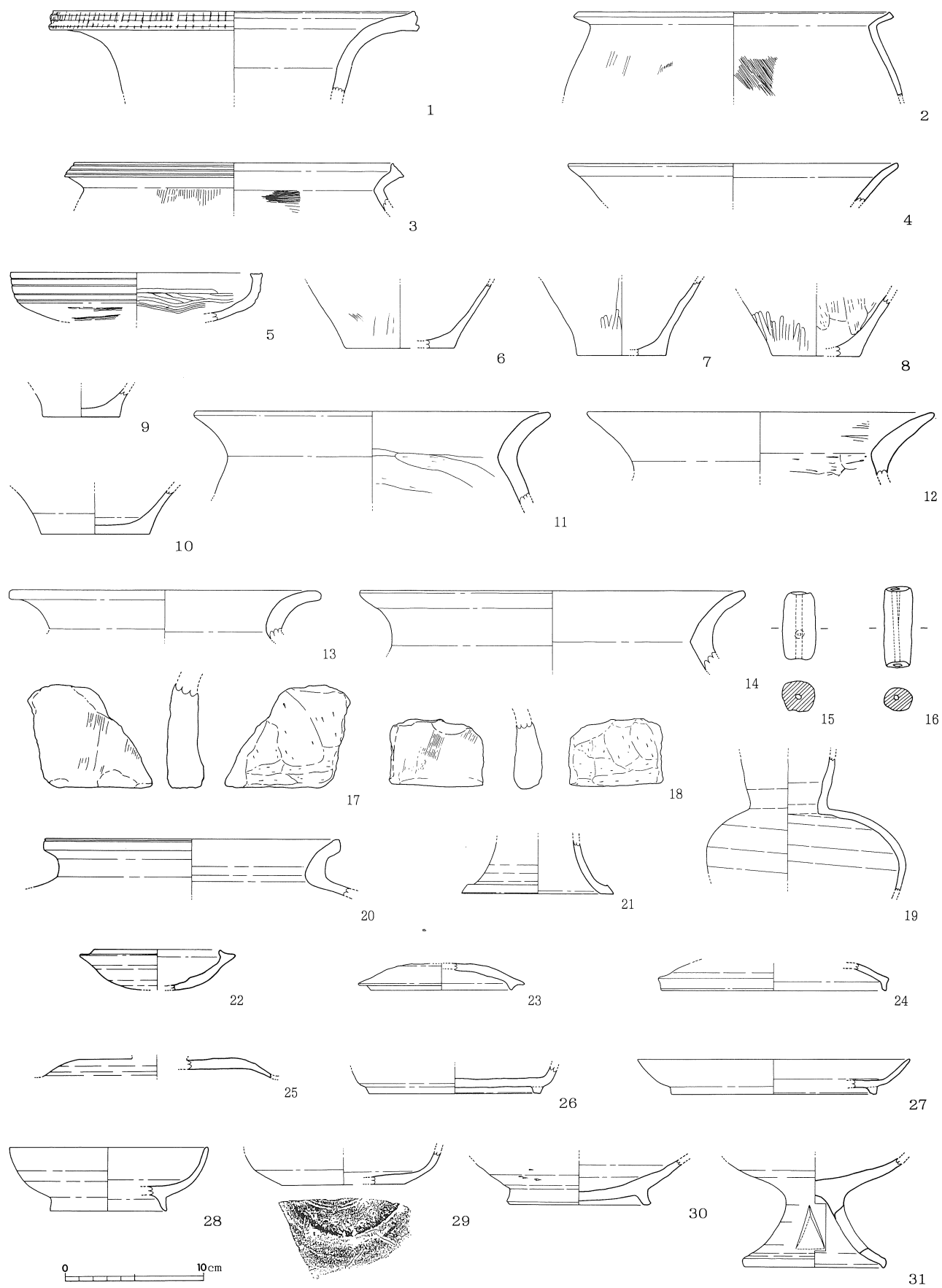
21~25・32は、須恵器坏蓋である。21~23は、口縁部に短く内傾するかえりをもつもので、21・22は上部に宝珠状のつまみを有している。いずれも、高広編年ⅡB期~ⅢA期頃に相当する資料と考えられ、7世紀代のものであろう。24・32は口縁部が直立するタイプのもので、やや後出し、7世紀末以降のものであろう。25は輪状のつまみが付くもので、外面上部はヘラケズリによる調整が行われている。

第14図-26~31・33、第15図-34は高台をもつ須恵器坏である。26は、高台部が直立して端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は糸切り後、ナデで糸切り痕を消している。27は、高台部はやや外傾して端部はほぼ平坦におさめている。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離され、ヘラ状工具により「\」印が刻まれている。28は、高台部が直立して端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は糸切り後、ナデで糸切り痕を消している。29は、高台部は外傾して端部は上方に向けて平坦面を作り出している。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。30は、高台部が短く外傾して端部は平坦におさめ、断面は四角形を呈している。底部はヘラ切りによって切り離されている。33・34は、高台部がやや外傾し、端部は丸みを帯びておさめている。以上のような高台をもつ坏は、高台部の形状から考えると30が9世紀代、その他は8世紀代のものであろう。

第15図-35~39は、須恵器坏である。35は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。また、底部と体部の間には明瞭な境をもたない。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。36は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反



第15図 14~16G r 出土遺物実測図(2)



第16图 17G r 出土遺物実測図

して丸くおさめている。37は、底部が回転糸切りにより切り離されている。38は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反して先細りとなり丸くおさめている。底部と体部の間には明瞭な境をもたず、内外面は回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りによって切り離されている。39は、底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。以上のような坏は、その特徴からおおよそ8世紀代の資料と考えられる。

第15図-40は、須恵器皿である。底部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部はヘラ切りによって切り離されている。須恵器皿の出現は8世紀後半以降と考えられることから、それ以降のものであろう。

41は、須恵器平瓶の頸部付近の破片で、内外面ともナデによる調整が行われている。7世紀代のものであろう。

42・43は、須恵器高坏である。42は脚部の破片で、脚端部をやや上方に向けて平坦面を作り出している。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、透し孔が認められる。43は筒部付近の破片で、2ヶ所に透し孔が認められる。いずれも古墳時代後期のものであろう。

#### 17G rの出土遺物 (第16図)

17G r～18G rにかけては下層からの湧水がひどく、調査区が狭小で遺構として捉える事はできなかったが、他のグリッドとは違って下層に粘質土が堆積していることから、旧河道であった可能性がある。

第16図-1は、弥生土器壺である。頸部から口縁部にかけて大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張して平坦面を作り出している。口縁拡張部には2条の凹線文が施され、その上からヘラ状工具によって刻目文がめぐらされている。松本編年Ⅳ期に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてのものであろう。

2・3は、弥生土器甕である。2は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にわずかに拡張して平坦面を作り出している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面にはススが付着している。松本編年ではⅢ-2様式頃の資料と考えられ、弥生時代中期中葉頃のものであろう。3は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部には3条の凹線文が施され、頸部下外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケによる調整が行われている。松本編年Ⅳ様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉～後期前葉にかけてのものであろう。

5は、弥生土器高坏である。口縁部は肥厚して上面にフラットな面を有し、2条の凹線文が施されている。坏部外面にも4条の凹線文が施され、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。松本編年Ⅳ-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉のものであろう。

6～10は、弥生土器壺あるいは甕の底部付近の破片である。8は、外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる調整が行われ、内外面にはススが付着している。その他は、外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。一概には言えないが、8はやや新しく、弥生時代中期後葉以降のものであろう。

第16図-4・11~14は、土師器甕である。4は、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。11・12・14は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。頸部下内面は、いずれもケズリによる調整が行われている。13は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。以上のような甕については時期的判断は難しいが、「く」に字状に屈折する口縁部をもつものは古墳時代後期頃、口縁部が比較的ゆるく屈折するものはやや後出するものであろう。

15・16は管状土錘である。16には穿孔が2度認められる。

17・18は、移動式竈の脚部破片である。いずれも外面は縦方向のハケ、内面は強いケズリによる調整が行われている。6世紀後半から8世紀前半の範疇に入る資料であろう。

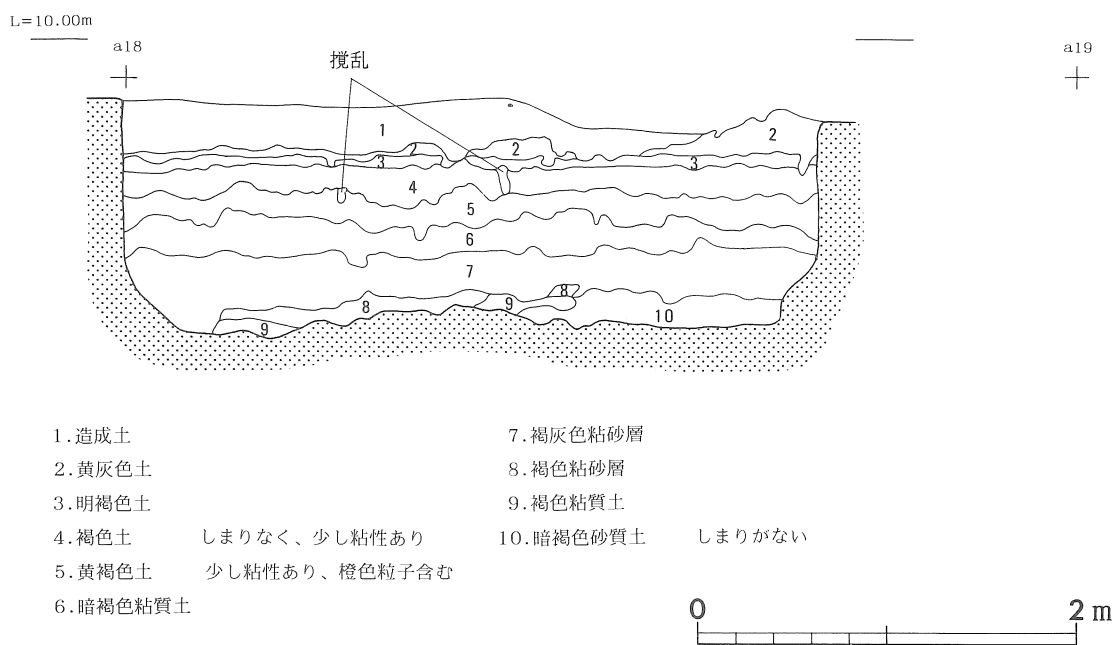
19は、須恵器平瓶である。やや外傾して立ち上がる口縁部を有し、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。7世紀代のものであろうか。

20は、須恵器甕あるいは横瓶であろう。頸部から口縁部にかけて外方に強く屈折し、口縁端部に平坦面を有して1条の凹線文が施されている。頸部下は内外面ともタタキによる調整が行われている。

21・31は、須恵器高坏である。21は脚部の破片で、脚端部を上方に拡張させている。31は、筒部の対応する2ヶ所に三角形の透し孔を有し、脚端部は下方に拡張している。いずれも古墳時代後期のものであろう。

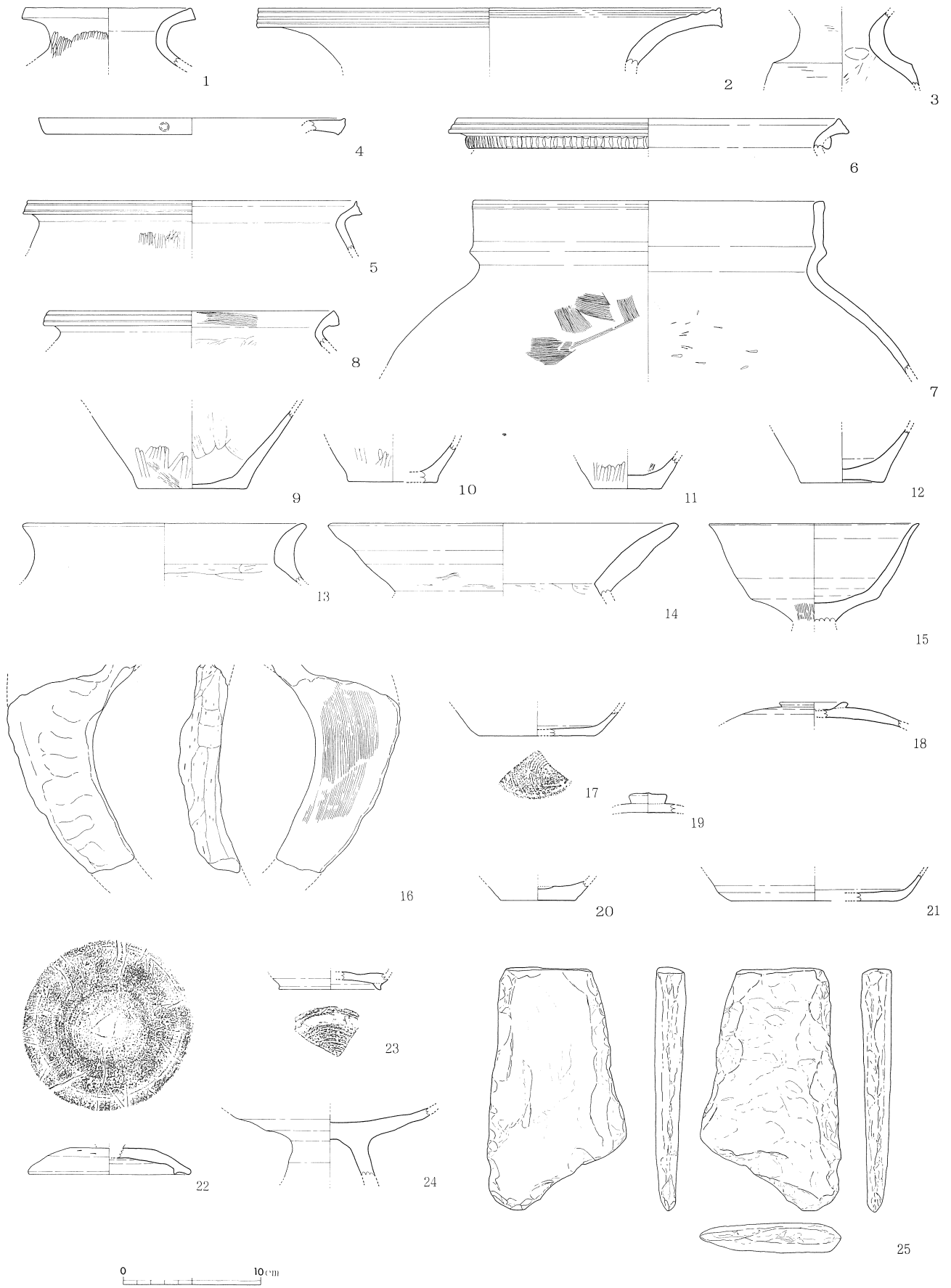
22は、須恵器坏身である。口縁部には短く内傾するかえりを有し、外面下方はケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われている。口径9.0cmとやや小形であることから、高広編年Ⅱ期頃に相当する資料と考えられ、7世紀前半頃のものであろう。

23~25は、須恵器坏蓋である。23は、口縁部に短く内傾するかえりを有す。24は、口縁部は直立して口縁端部は丸くおさめている。25は、口縁端部が屈曲し、上部にはつまみが付くタイプのものであろう。23は7世紀代、24・25は8世紀代のものであろう。



第17図 a18~a19セクション図





第18图 18G r 出土遺物実測図

第16図-26~28・30は、高台をもつ須恵器坏あるいは皿である。26は、高台部は短く直立して断面は四角形を呈している。27は皿で、高台部は短く直立し、端部はやや内傾して凹面を作り出している。底部から口縁部にかけては直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。26・27は、その特徴から9世紀代のものであろう。28は、高台部はやや外傾して端部は丸くおさめている。30は、高台部はやや外傾して端部は丸みを帯びておさめている。外面下方はヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切り後、ナデによって糸切り痕を消している。28・30は、その特徴から8世紀代のものであろう。

### 18Grの出土遺物 (第18図)

18Grは、17Grと同様に旧河道と考えられる位置にあり、多くの遺物を検出している。第17図のセクション図をみると、1~3層については他のグリッドとほぼ同様であるが、4層より下位については旧河道の覆土と考えられ、粘質土や粘砂層が堆積し、地山であるやや粗い黄褐色砂層に達している。

第18図-1・5・6・8は弥生土器の甕である。1は、頸部から口縁部にかけてやや強く外方に屈折し、口縁端部は上方に拡張して平坦面を有しているが、無文である。頸部下外面はミガキ、内面はナデによる調整が行われている。5は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部には2条の凹線文が施され、頸部下外面は縦方向のハケとミガキ、内面はナデによる調整が行われている。6は、頸部から口縁部にかけて短く「く」の字状に屈折し、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部には2条の凹線文が施され、外面頸部には指頭圧痕文帯を貼付け、めぐらせている。8は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部には2条の凹線文が施され、口縁部外面はナデ、内面はハケによる調整が行われている。また、頸部下内面にはケズリによる調整が認められる。以上のような甕は、1がやや古い様相を示しているが、その他は松本編年Ⅳ様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてのものであろう。

2・4は弥生土器壺である。2は、頸部から口縁部にかけて朝顔状に大きく開き、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部には3条、内面にも3条の凹線文を施し、めぐらせている。4は、口縁端部が上下に拡張し、口縁拡張部に円形浮文を貼付けている。いずれも松本編年Ⅳ様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてのものであろう。

3は、弥生土器の器台であろう。風化が著しいが、脚端部はやや外傾し、凹線文が施されている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。

6は、古式土師器の甕である。複合口縁は直立ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや丸みを帯びておさめている。頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。草田編年では7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期のものであろう。

9~12は、弥生土器壺あるいは甕の底部付近の破片である。9は、外面は縦方向のミガキと一部はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。弥生時代中期後葉以降のものであろう。10~12は、外面は縦方向のミガキ、内面は基本的にはナデによる調整が行われている。壺や甕の時期から考えると、弥生時代中期中葉以降のものであろう。

第18図-13・14は、土師器甕である。13は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。8世紀以降のものであろう。14は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部中ほどはやや肥厚して外面に稜をなしている。このような甕はやや古い様相を示し、古墳時代中期頃のものであろう。

15は、土師器高坏である。坏部はやや深く、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面ともにナデ、外面下方はハケによる調整が行われている。なお、内外面ともに朱塗りされている。古墳時代後期のものであろう。

16は、移動式竈の庇部の破片である。外面はナデによる調整が行われ、指頭圧痕が明瞭に残っている。庇部内側はハケ、上方にはケズリによる調整が行われている。6世紀後半から8世紀前半にかけてのものであろう。

17・20は、土師器坏である。いずれも内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。全体の形状は不明であるが、8世紀以降のものであろう。

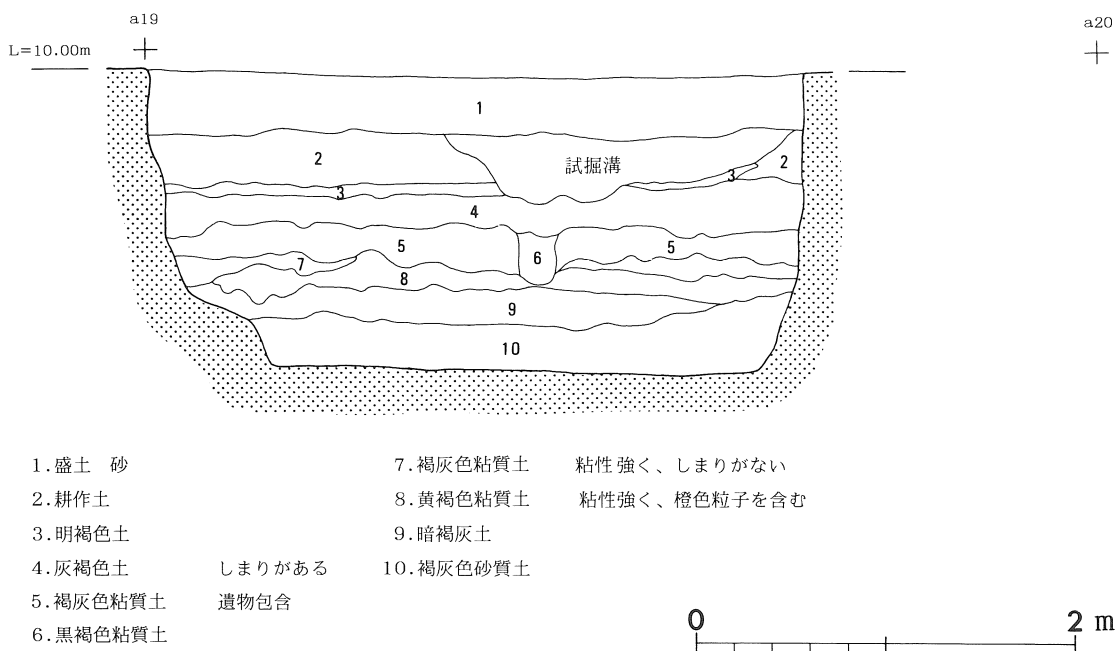
18・19は、須恵器坏蓋である。18は輪状のつまみが付くもので、外面はヘラケズリによる調整が行われている。19は、宝珠状のつまみが付くものである。いずれも7世紀代以降のものであろう。

21は、須恵器坏である。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。

22は、ほぼ完形の須恵器坏蓋である。外面上方はヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われ、口縁内面には短く内傾するかえりを有している。7世紀中葉頃のものであろうか。

23は、高台をもつ須恵器坏である。高台部はやや短く外傾し、端部は内傾しておさめている。底部は回転糸切りによって切り離されている。8世紀代以降のものであろう。

24は、須恵器高坏であり、内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。

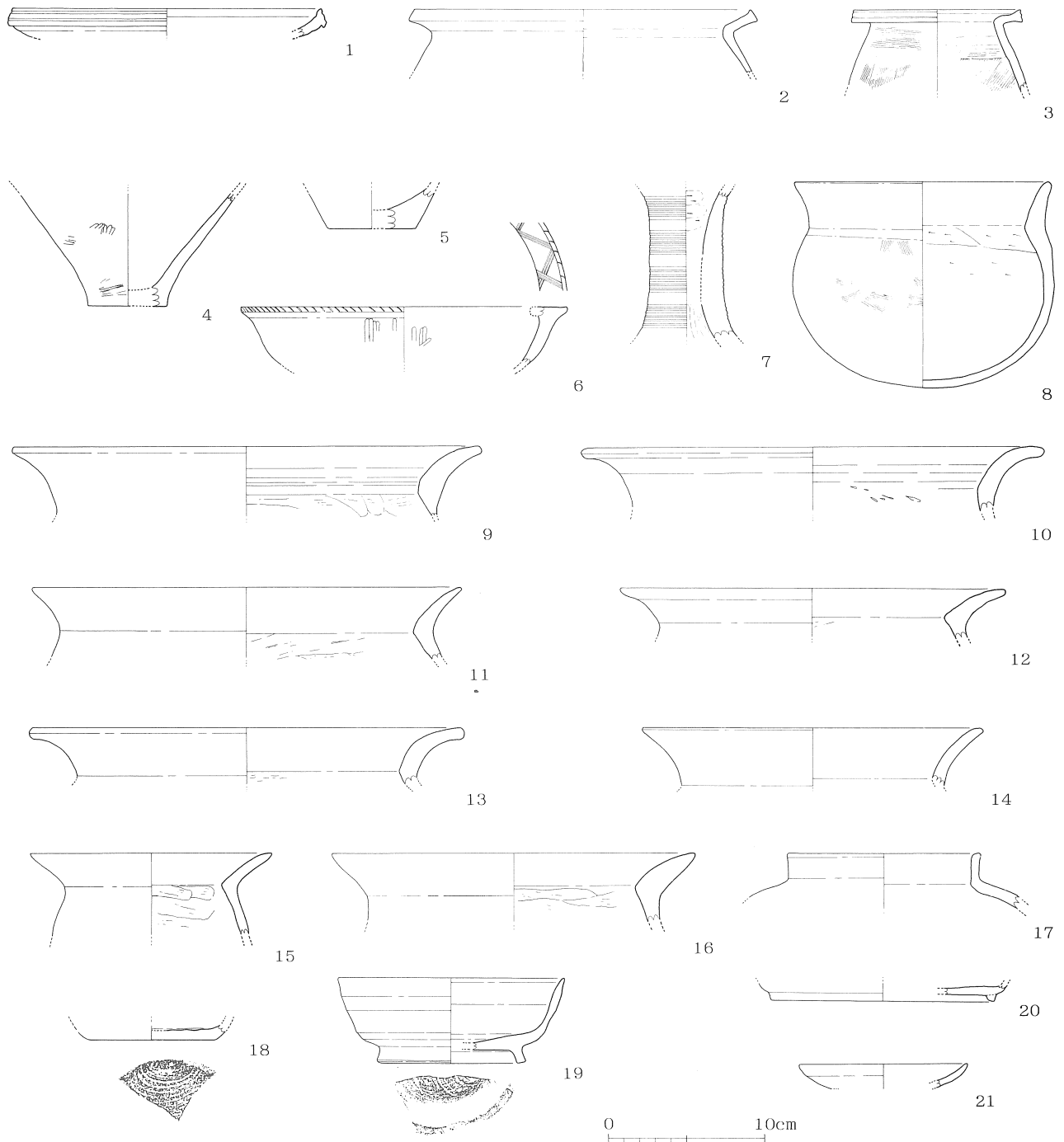


第19図 a19～a20セクション図

第18図-25は、打製石斧である。最大長17.5cm、最大幅10.0cm、厚さ2.1cmを測り、両面から刃部を削り出している。このような打製石斧は、一般的には縄文時代晩期頃まで使用されたものと考えられており、それ以前のものであろう。市内でも三田谷 I 遺跡から多量に出土している。なお、石材には流文岩を用いている。

### 19G r の出土遺物 (第20図)

19G r も、17~18G r と同様に旧河道と考えられる位置にあり、多くの遺物を検出している。第19図のセクション図をみると、4層から下位が旧河道の覆土と考えられ、褐灰色や黒褐色の粘質土が堆



第20図 19G r 出土遺物実測図

積し、最下層には褐灰色砂質土が堆積している。

第20図-1～3は、弥生土器の甕である。1は、口縁端部が上下に拡張して2条の凹線文が施されている。2は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折して口縁端部は上下に拡張し、ナデて凹面を作っている。3は、頸部から口縁部にかけて鋭く外方に屈折し、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部には2条の凹線文が施され、頸部下外面は縦方向のハケ、内面は横・斜め方向のハケによる調整が行われている。以上のような甕は、松本編年Ⅳ様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてのものであろう。

4・5は、弥生土器壺あるいは甕の底部付近の破片である。4は、底径が小さくなるという特徴から、弥生時代後期のものであろう。外面は縦方向のミガキと一部にハケによる調整が行われている。

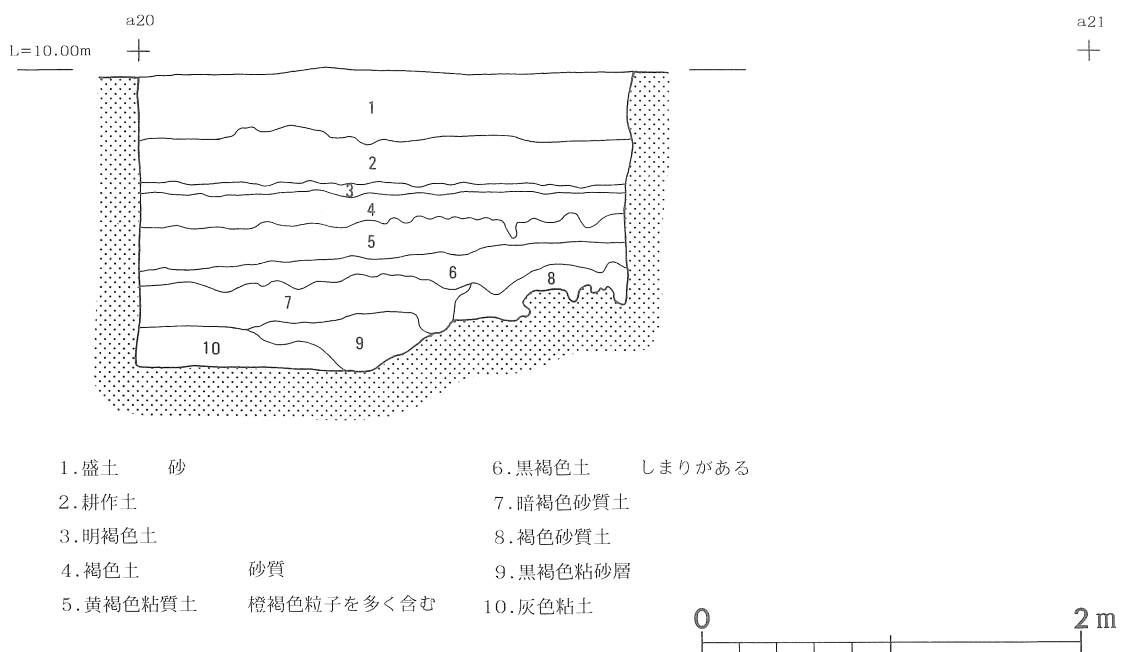
6・7は、弥生土器高坏である。6は坏部で、口縁端部は内外に水平方向に突出し、フラットな面を作り出して斜格子文を施している。また、外面に突出する口縁端部には刻目文を施し、内外面とも縦方向のミガキによる調整が行われている。7は筒部の破片で、6本単位からなる凹線文が4段に施されている。6は弥生時代中期中葉頃、7はやや後出するものだろう。

8は、ほぼ完形の土師器甕である。底部は丸底で体部は球形に張り出し、頸部から口縁部にかけてはゆるく外方に屈折して口縁端部は丸くおさめている。頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。このような形態的特徴をもつ甕は8世紀代のものと考えられる。

9～16も土師器甕である。12は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。それ以外は、頸部から口縁部にかけて比較的ゆるく外方に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。12は古墳時代後期、それ以外はやや後出するものであろう。

17は、須恵器壺である。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。18は、須恵器坏である。底部は回転糸切りによって切り離されている。

19・20は、高台をもつ須恵器坏である。19は、高台部がやや外傾して端部はほぼ平坦におさめてい



第21図 a20～a21セクション図

る。底部から口縁部にかけてはほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。8世紀代のものであろう。20は、高台部が短く直立して端部断面は四角形を呈している。なお、底部はヘラ切りによって切り離されている。9世紀代のものであろう。

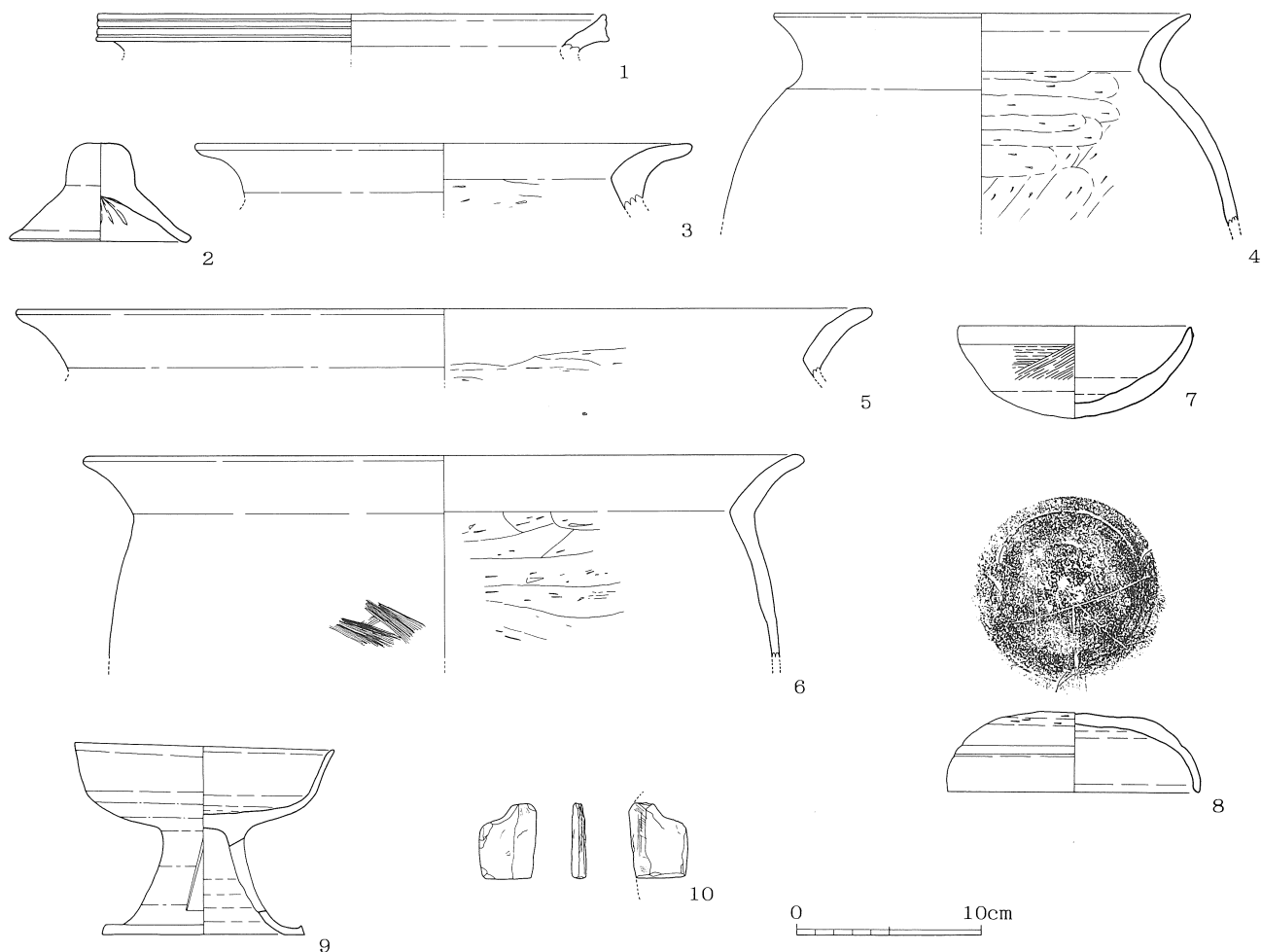
第20図-21は、陶器の皿であろう。内面と外面口縁部付近は黒褐色に施釉されている。近世の遺物であろう。

### 20G rの出土遺物 (第22図)

20G rは、17G rから続く旧河道の西側片部と考えられる位置にある。A19G rでは西側肩部と考えられる溝状遺構を部分的にはあるが検出しており、20G rへと東南東から西北西へ伸びているものと予想される。第21図のセクション図をみると、西側の地山が高くなっていることから旧河道の肩部と考えられる。4層より下位が遺構の覆土と考えられ、粘質土や砂質土、粘砂層が堆積し、地山であるやや粗い黄褐色砂層に達している。

第22図-1は、弥生土器甕である。口縁端部は上下に拡張して3条の凹線文が施されている。松本編年Ⅳ期に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてのものであろう。

2は、弥生土器の蓋であろう。内外面ともナデ、内面上部には刺突具で突いたような痕跡が認められる。



第22図 20G r 出土遺物実測図

第22図-3~6は、土師器甕である。3は、頸部から口縁部にかけて外方に強く屈折し、口縁端部は丸くおさめている。頸部下内面はケズリによる調整が行われている。4~6は、頸部から口縁部にかけて外方に比較的ゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。いずれも頸部下内面はケズリによる調整が行われ、6の胴部外面にはハケによる調整が認められる。3は古墳時代後期頃、4~6はやや後出するものであろう。

7は、土師器坏身である。内外面とも朱塗りされ、底部は丸底で口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。このような坏は、須恵器出現前後のものと考えられ、5世紀後半頃のものであろう。

8は、口径13.6cm、器高4.3cmを測る完形の須恵器坏蓋である。天井部はやや丸みを帯び、外面中ほどに2条の沈線を施している。外面下部は回転ナデ、上部はヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整が行われている。なお、外面天井部には「×」印が刻まれている。高広編年I B期に相当する資料と考えられ、6世紀末から7世紀初頭にかけてのものであろう。

9は、ほぼ完形の須恵器高坏で、口径14.1cm、底径11.0cm、器高10.4cmを測る。脚部には2ヶ所に三角形の透し孔が入り、脚端部は上方に拡張している。坏部口縁端部はやや外反して丸くおさめ、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。8と同様に高広編年I B期に相当する資料で、6世紀末から7世紀初頭にかけてのものであろう。

10は、石鋸であろう。片端を両面から研磨して刃部を作り出している。

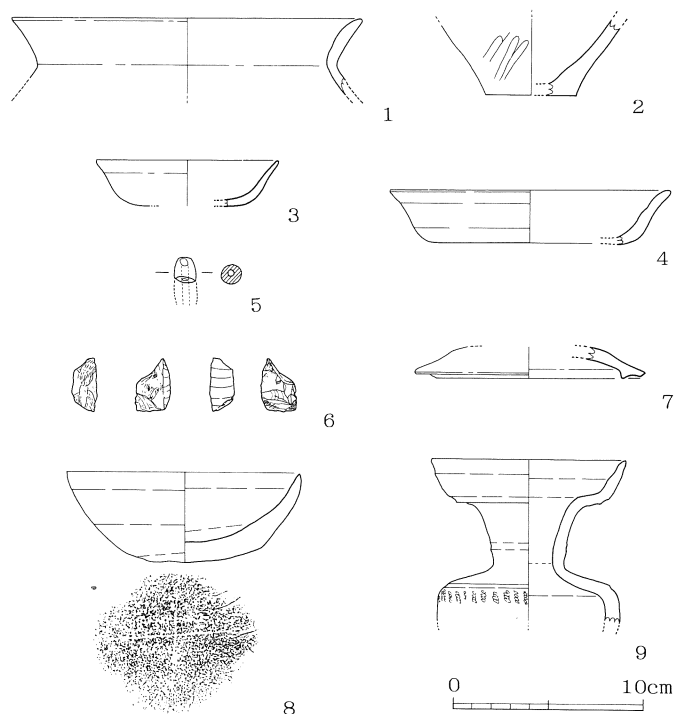
### その他の出土遺物 (第23図)

第23図-1は、古式土師器の布留式傾向甕である。単純口縁で、口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。胎土が出雲地域のものとは異なり、茶褐色を呈していることから搬入品と考えられる。

2は、弥生土器の壺あるいは甕の底部付近の破片である。外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。

3・4は、土師器皿であろう。いずれも底部と体部の間には明瞭な境をもたず、口縁端部は外反して丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、朱塗りされている。器形から考えると8世紀後半以降のものであろう。

5は管状土錘で、約2/3が欠損している。6は、黒曜石である。製品として使用されたものではなく、石核であろう。



第23図 その他の遺物実測図

第23図－7は、須恵器坏蓋である。口縁部内面に短く内傾するかえりが付くものである。7世紀中葉頃のものであろう。

8は、土師器坏身である。内外面とも朱塗りされ、底部は丸底で外面には「×」印が刻まれている。底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。なお、内外面ともナデによる調整が行われている。第22図－7と同様に5世紀後半頃のものであろう。

9は、須恵器甗である。頸部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。頸部には波状文、胴部には刺突文が施されている。また、頸部は細く短いという特徴をもっている。このような甗は、施文にはやや古い様相が認められるが、7世紀代のものであろう。

#### 註

- (1)「神門地区遺跡詳細分布調査報告書」 出雲市教育委員会 1989年
- (2)「高広遺跡発掘調査報告書」 島根県教育委員会 1984年
- (3)「三田谷 I 遺跡発掘調査説明会資料」 島根県教育委員会 1997年
- (4)「藤ヶ森遺跡（I 地点・II 地点）発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 1998年
- (5)「矢野遺跡第2 地点発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 1991年
- (6)「弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編」 正岡勝夫・松本岩雄編 木耳社 1992年
- (7)「南講武草田遺跡」 鹿島町教育委員会 1992年



## VI. 総 括

本書では、平成7年度に発掘調査を実施した古志本郷遺跡について、遺構や遺物などを通して検討してきた。ここでは、どの時期に遺構が築かれ、集落が営まれていたかを、それぞれ時期別にまとめることにする。

### 弥生時代中期中葉～後期

この地域に遺跡が形成され始めた時期にあたる。明確な遺構は検出していないが、遺物には弥生土器壺・甕・高坏・器台などがある。特に、壺や甕の口縁部に凹線文が入る初段階（松本編年Ⅳ期）の遺物が多く、この地域周辺に弥生時代後期前葉頃を中心に集落が営まれていたことが窺える。

また、当該期の遺物が調査区の西側を中心として出土する傾向があることは、弥生時代の遺跡として知られる田畑遺跡の東端にあたる位置環境からも注視していく必要がある。

### 古墳時代前期～中期

当該期の遺物は極端に少なく、遺構も検出されていない。この傾向は、出雲平野における遺跡の特徴でもあり、今後も注視していく必要がある。その中であって、胎土の違いから搬入品と考えられる布留式傾向甕（第23図-1）が1点ではあるが出土していることは注意される。

### 古墳時代後期～終末期

この地域が再び繁栄する時期である。遺物の出土量も多く、中には完形の状態で出土しているものもあり、良好な資料となっている。土師器や須恵器には、ヘラ状工具によって「×」印が刻まれているものも数点出土している。また、遺構には伴っていないが、移動式竈・甑・土製支脚がセットで出土していることも注目される。甑の中には出雲地域ではあまり類例のない、口縁部が外方へゆるく屈折するものも認められている。

### 奈良時代～平安時代

この地域が最も繁栄した時期にあたり、遺物の出土量も多く、検出できた遺構も当該期のものである。

SX01は、8世紀前半頃から9世紀前半にかけて機能していたものと考えられ、当該期の遺物を多く検出しているが、須恵器坏にはヘラ状工具によって「×」印が刻まれているものも認められている。SD01は、8世紀中葉から9世紀前半にかけて機能していたものと考えられ、須恵器坏・皿などを中心に検出している。遺物の中には内面に漆が付着し、漆壺として利用されていた須恵器も認められている。

古志本郷遺跡では、これまでの発掘調査によって弥生時代中期から近世に至るまで連綿と集落が営まれていたことが知られていたが、遺跡の南端部においては、古墳時代後期から平安時代初期を中心に生活が営まれていたようである。

## 出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
7-1	A2GrSX01	土師器 甕	33.6	—	—	口縁部内外面横方向ハケ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/ケズリ	橙褐色	普通 1~2mm大の白色 砂粒・石英を 含む	普通	
-2	A1GrSX01	土師器 甕	28.2	—	—	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	外/淡褐色 内/褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・金雲 母を含む	良好	
-3	A1GrSX01	土師器 甕	32.0	—	—	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	
-4	A1GrSX01	土師器 甕	28.3	—	—	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/ケズリ	淡褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	外面スス 附着
-5	A2GrSX01	土師器 甕	32.8	—	—	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	外面スス 附着
-6	A1GrSX01	土師器 高台付 坏	—	11.3	—	内外面ナデ	橙褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	内外面朱 塗り
-7	A1GrSX01	土師器 坏蓋	14.9	—	—	内外面ナデ	淡橙褐色	密	良好	内外面朱 塗り
-8	A2GrSX01	土師器 高坏	17.7	—	—	内外面ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含 む	良好	内外面朱 塗り
-9	A2GrSX01	須恵器 鉢	17.6	—	—	内外面ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-10	A1GrSX01	須恵器 高台付 坏	12.8	9.0	4.8	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	外面体部 にヘラによ る記号 あり
-11	A0GrSX01	須恵器 高台付 坏	15.2	9.6	4.0	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-12	A1GrSX01	須恵器 高台付 坏	—	8.0	—	内外面回転ナデ 底/静止糸切り	外/暗灰色 内/灰色	密 1mm以下の白色 砂粒を含む	良好	
-13	A2GrSX01	須恵器 坏蓋	11.2	—	—	外/回転ナデ、上部ケズリ 内/回転ナデ	暗灰色	密 1~2mm大の白 色砂粒・石英を 含む	良好	
-14	A2GrSX01	須恵器 坏	—	11.0	—	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母を含む	やや不良	
-15	A0GrSX01	須恵器 高坏	—	—	—	内外面回転ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	普通	ヘラによ る透し孔 2ヶ所 あり

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
7-16	A1Gr SX01	須恵器 壺or甕	-	5.3	-	内外面回転ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 石英を含む	良好	
10-1	A14Gr SD01	土師器 甕	31.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	外/橙褐色 内/黄褐色	密 1~2mm大の白色 砂粒・石英・ 雲母・金雲母を 含む	やや不良	
-2	A15Gr SD01	土師器 甕	22.8	12.6	19.1	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/ケズリ	外/橙褐色 内/褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	下端部に 穿孔あり
-3	a16Gr SD01	土師器 土製支脚	-	8.8	-	外/ナデ 内/ケズリ	暗褐色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母・金雲母を 含む	普通	
-4	A14Gr SD01	土師器 皿	-	8.3	-	内外面ナデ 底/静止糸切り・	淡褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	普通	内外面朱 塗り
-6	A14Gr SD01	須恵器 坏蓋	13.0	-	1.85	内外面ナデ 上部/ヘラ切り	灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	
-7	A14Gr SD01	須恵器 坏蓋	15.0	-	-	内外面回転ナデ	淡灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	普通	
-8	a14Gr SD01	須恵器 坏蓋	12.8	-	-	内外面ナデ 上部/ヘラ切り	外/緑灰色 内/灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	普通	
-9	a15Gr SD01	須恵器 甕	18.0	-	-	内外面ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 石英を含む	良好	内外面に 自然釉が かかる
-10	A14Gr SD01	須恵器 壺	-	5.7	-	内外面ナデ 底/ヘラ切り	灰色	密 1mm大の白色砂 粒を含む	普通	内面に漆 附着
-11	A15Gr SD01	須恵器 高台付 坏	-	8.7	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-12	a15Gr SD01	須恵器 甕	-	-	-	外/凹線文5条以上入り、 その間に波状文 内/ナデ	暗灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	
-13	A15Gr SD01	須恵器 高台付 坏	-	15.9	-	内外面ナデ 底/ヘラ切り	淡灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	やや不良	
-14	A15Gr SD01	須恵器 高台付 坏	-	13.9	-	内外面ナデ 底/ヘラ切り	灰色	普通 1~2mm大の白 色砂粒を含む	やや不良	
-15	A15Gr SD01	須恵器 坏	11.8	-	-	内外面回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色 砂粒を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
10-16	A16Gr SD01	須恵器 高坏	-	-	-	内外面回転ナデ	外/灰色 内/淡灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	普通	
11-1	A2Gr	土師器 甕	29.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下内/ケズリ	褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-2	A2Gr	土師器 鉢	20.6	-	-	外/ナデ 内/ナデ、縦方向ハケ	淡褐色	密 石英・雲母を含 む	普通	
-3	A2Gr	土師器 甕	44.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下内/ケズリ	橙褐色	密 2mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	やや不良	
-4	A4Gr	土師器 坏	13.6	6.6	4.05	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	外/橙褐色 内/淡橙褐 色	密 石英・雲母を含 む	普通	
-5	A4Gr	土師器 坏	12.4	6.1	3.9	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	やや不良	外面スス 附着
-6	A3Gr	土師器 坏	12.0	6.4	4.1	内外面回転ナデ 底/糸切り後、ナデ	橙褐色	密 石英・雲母を含 む	良好	
-7	A4Gr	土師器 坏	-	7.2	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 石英・雲母を含 む	普通	
-8	A4Gr	土師器 小皿	8.0	5.4	2.0	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母を含 む	普通	
-9	A3Gr	土師器 高台付 坏	-	7.0	-	内外面ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母・金 雲母を含む	良好	
-10	A3Gr	須恵器 壺	23.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下外/タタキの後、 横方カキメ 内/タタキ	外/淡灰色 内/緑灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	
-11	A2Gr	須恵器 坏or壺	15.0	-	-	内外面回転ナデ	暗灰色	密 石英を含む	良好	
-12	A1Gr	須恵器 坏or壺	16.0	-	-	内外面回転ナデ	外/黒褐色 内/暗灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-13	A2Gr	須恵器 坏蓋	15.2	-	-	内外面ナデ	暗褐色	密 石英を含む	やや不良	
-14	A1Gr	須恵器 坏蓋	15.1	-	2.35	内外面ナデ	外/黒褐色 内/暗灰色	密 石英を含む	良好	外面に自然釉がか かる 輪状つま みが付く

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
11-15	A 2 G r	須恵器 坏蓋	-	-	-	内外面ナデ	淡灰色	密 石英を含む	普通	外面に自然釉がかかる
-16	A 3 G r	須恵器 高台付 坏	-	9.2	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密 石英・雲母・金 雲母を含む	良好	
-17	A 3 G r	須恵器 高台付 坏	-	9.5	-	内外面ナデ 底/ヘラ切り	灰色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	普通	
-18	A 2 G r	須恵器 坏	-	8.6	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	暗緑灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	
12-1	A 7 G r	土師器 甕	35.0	-	-	口縁部内外面ナデ	淡橙色	密 石英を含む	普通	
-2	a 8~a 9 sec	土師器 甕	18.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	外/褐色 内/淡褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	外面スス 付着
-3	a 9 G r	土師器 甕	-	-	-	内外面ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含 む	普通	穿孔あり
-4	A 8 G r	土師器 坏蓋	-	-	-	内外面ナデ	淡赤褐色	密 石英を含む	普通	つまみ部
-5	A 6 G r	瓦質土器 壺	49.6	-	-	外/ナデ、一部ハケ 内/横方向ハケ	外/黒灰色 内/黒褐色	密 石英を含む	普通	
-6	a 8 G r	瓦質土器 鉢	25.8	-	-	外/ナデ、一部ハケ 内/横・斜め方向ハケ	黒褐色	普通 石英を含む	良好	外面スス 付着
-7	a 9 G r	土師器 坏	-	6.8	-	内外面ナデ 底/静止糸切り	橙褐色	密 石英・雲母を含 む	普通	内外面朱 塗り
-8	a 5 G r	土師器 摺鉢	-	10.2	-	内外面ナデ 内面底部に摺目	淡橙褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	やや不良	
-9	a 5 G r	土師器 坏	-	4.2	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-10	a 5 G r	土師器 坏	-	5.4	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 石英・雲母を含 む	良好	
-11	a 5 G r	土師器 坏	-	5.8	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 石英・金雲母を 含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
12-12	a 6 G r	土師器 足高高台付 坏	-	7.4	-	内外面ナデ	褐色	密 褐色粒子・石英・ 雲母を含む	普通	
-13	a 5 G r	須恵器 坏	18.0	-	-	内外面回転ナデ	暗灰色	密 1 mm 大の白色砂 粒を含む	良好	
-15	a 5 G r	須恵器 坏蓋	15.5	-	-	外/回転ナデ、上部ヘラ ケズリ 内/回転ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 1 mm 大の白色砂 粒・石英を含む	普通	
-16	a 5 G r	須恵器 坏蓋	15.0	-	-	内外面回転ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 1 mm 大の白色砂 粒・石英を含む	良好	
-17	a 5 G r	須恵器 高台付 坏	-	10.0	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	暗緑灰色	密 1 mm 以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-18	a 7 G r	須恵器 高台付 坏	-	10.4	-	内外面ナデ 底/ヘラ切り	淡灰色	密 1 mm 以下の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	良好	
-19	a 5 G r	須恵器 坏	-	9.0	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	外/緑灰色 内/暗緑灰 色	密 1 mm 大の白色砂 粒・石英を含む	普通	
-20	a 10 G r	須恵器 坏	-	8.0	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密 1 mm 以下の白色 砂粒を含む	良好	糸切り痕 が2度あ る
-21	a 9 G r	須恵器 高坏	-	9.8	-	内外面回転ナデ	灰色	密 石英を含む	良好	
-22	A 10 G r	青磁 碗	14.2	-	-	内外面回転ナデ	淡緑色	密	良好	
13-1	a 11 G r	弥生土器 壺	-	-	-	外/10条以上の三角形文 帯を貼付ける 内/斜め方向ハケ	外/褐色 内/淡褐色	普通 石英・雲母・金 雲母を含む	良好	
-2	A 13 G r	古式土師器 甕	27.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/やや下からケ ズリ	淡褐色	普通 1 mm 大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	やや不良	
-3	a 12~a 13 sec	弥生土器 甕	16.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハケ	橙褐色	普通 1 mm 大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	口縁端部 に3条の 凹線文
-4	A 12 G r	土師器 甗	-	-	-	内外面ナデ	褐色	密 1 mm 大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	穿孔あり
-5	A 13 G r	土師器 甕	19.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/ケズリ	淡褐色	密 1 mm 大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
13-6	a13Gr	土師器 甕	23.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	外/淡黄褐色 内/淡褐色	やや粗い 1~2mm大の白色 砂粒・石英・ 雲母・金雲母を 含む	良好	
-7	a12Gr	土師器 甕	27.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	外/褐色 内/黒褐色	普通 1~2mm大の白色 砂粒・石英・ 雲母を含む	普通	外面スス 付着
-8	A13Gr	土師器 甕	30.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	褐色 (一部 橙褐色)	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	やや不良	
-9	A13Gr	土師器 甕	25.5	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/ケズリ	外/淡褐色 内/橙褐色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母を含む	普通	
-10	a12Gr	土師器 高坏	16.6	-	-	外/ナデ、下方はケズリ 内/ナデ	淡橙褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	内外面朱 塗り
-11	a12Gr	土師器 高坏	14.2	-	-	外/ナデ、下方はケズリ 内/ナデ	淡橙褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	内外面朱 塗り
-12	a13Gr	土師器 坏	11.4	9.0	3.0	内外面回転ナデ	淡褐色	密 石英を含む	良好	内外面朱 塗り
-13	a13Gr	土師器 坏	-	7.7	-	内外面回転ナデ	淡褐色	密 石英を含む	良好	内外面朱 塗り
-14	A13Gr	土師器 坏	11.2	-	3.85	内外面回転ナデ	淡褐色	密 石英を含む	良好	内外面朱 塗り
-15	a11Gr	須恵器 坏蓋	14.2	-	-	内外面回転ナデ	灰褐色	密 1mm以下の白色 砂粒を含む	やや不良	
-16	a11Gr	須恵器 坏蓋	-	-	-	内外面ナデ	淡灰色	普通 石英・雲母を含 む	良好	輪状つま みが付く
-17	a13Gr	須恵器 坏蓋	15.2	-	-	外/回転ナデ、上部ケズリ 内/回転ナデ	暗緑灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-18	a12Gr	土師器 高坏	-	-	-	外/縦方向ハケ	淡褐色	普通 石英・雲母を含 む	普通	内外面朱 塗り
-19	A13Gr	須恵器 壺	9.0	-	-	内外面回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-20	A13Gr	須恵器 甕	15.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/タタキ	外/黒褐色 内/暗灰色	密 1mm大の白色砂 粒を含む	やや不良	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
13-21	a13Gr	須恵器 高台付 坏	-	8.2	-	内外面回転ナデ	外/灰褐色 内/暗灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-22	a12Gr	須恵器 高台付 坏	-	12.0	-	内外面回転ナデ	灰色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	普通	
-23	a13Gr	須恵器 坏	12.2	7.3	4.0	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密 石英を含む	普通	
-24	a13Gr	須恵器 坏	-	7.0	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-25	a11Gr	須恵器 高坏	-	-	-	内外面回転ナデ	淡灰色	密 石英を含む	普通	2ヶ所に 透し孔あ り
-26	a13Gr	陶器 鉢	26.8	-	-	内外面ナデ	橙褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	口縁端部 に突帯貼 付け 赤褐色の釉 がかかる
14-1	A16Gr	弥生土器 甕	15.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/横方向ハケ 内/ケズリ	褐色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英を 含む	普通	外面スス 付着 口縁端部 に3条の 凹線文
-2	A14Gr	弥生土器 甕	17.8	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母を含む	普通	口縁端部 上方に拡 張する
-3	A15Gr	弥生土器 甕	12.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハケ	外/緑褐色 内/褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	外面スス 付着
-4	A14Gr	弥生土器 壺or甕	-	8.2	-	風化著しく不明	淡褐色	普通 石英・雲母・金 雲母を含む	普通	
-5	A14Gr	弥生土器 壺or甕	-	4.7	-	内外面ナデ	淡黄褐色	粗い 石英・雲母を含 む	普通	
-6	a16Gr	弥生土器 甕	-	4.8	-	外/ハケ、縦方向ミガキ 内/ナデ	外/褐色 内/淡褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-7	A14Gr	土師器 甕	23.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	
-8	A14Gr	土師器 甕	17.7	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	赤褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	不良	
-9	A15Gr	土師器 甕	18.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	外/橙褐色 内/褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	



挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
14-10	A14Gr	土師器 甕	21.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	橙褐色	やや粗い 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
-11	A14Gr	土師器 甕	27.9	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	褐色	やや粗い 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-12	a16Gr	土師器 甕	30.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	外/灰褐色 内/褐色	普通 1~2mm大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
-13	A14Gr	土師器 甕	30.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
-14	a15Gr	土師器 甕	11.5	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦・斜め方向 ハケ 内/ケズリ	外/暗褐色 内/黄褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	
-15	a15~a16 sec	土師器 坏	-	8.6	-	内外面ナデ 底/ヘラ切り	淡橙褐色	密 石英を含む	普通	内外面朱塗り
-16	a16Gr	土師器 坏	-	7.8	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	普通	内外面朱塗り
-17	a16Gr	土師器 坏	-	9.8	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	普通	内外面朱塗り
-18	a14Gr	土師器 高坏	-	9.8	-	内外面ナデ	褐色	やや粗い	やや不良	内外面朱塗り
-19	A14Gr	土師器 土製支脚	-	15.0	-	外/ナデ 内/ケズリ	褐色	やや粗い 1~2mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面に指頭圧痕残る
-20	a14Gr	土師器 土製支脚	-	-	-	ナデ	褐色	やや粗い 1~2mm大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面に指頭圧痕残る
-21	a16Gr	須恵器 坏蓋	-	-	-	内外面ナデ	灰色	密 石英を含む	良好	宝珠状つまみ部
-22	A16Gr	須恵器 坏蓋	9.8	-	1.6	外/ナデ、上部ヘラ切り 内/ナデ	灰色	密 石英を含む	普通	凝宝珠状つまみが付く
-23	a16Gr	須恵器 坏蓋	17.2	-	-	内外面回転ナデ	灰色	密 石英を含む	良好	
-24	a16Gr	須恵器 坏蓋	13.0	-	-	内外面回転ナデ	淡灰色	密 石英を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
14-25	a16Gr	須恵器 坏蓋	-	-	-	外/上部ヘラケズリ 内/ナデ	灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	輪状つま みが付く
-26	a15~a16 sec	須恵器 高台付 坏	-	8.6	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り後、ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-27	a15Gr	須恵器 高台付 坏	-	7.5	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	外面底部 にヘラ状 工具によ る記号あ り
-28	a16Gr	須恵器 高台付 坏	-	9.1	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り後、ナデ	灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-29	a15Gr	須恵器 高台付 坏	-	8.6	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	外/暗灰色 内/灰色	密 石英を含む	普通	
-30	a15Gr	須恵器 高台付 坏	-	11.4	-	内外面回転ナデ 底/ヘラ切り	灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	普通	
-31	a14Gr	須恵器 高台付 坏	-	8.6	-	内外面回転ナデ	灰色	普通 石英を含む	普通	
-32	A14Gr	須恵器 坏蓋	15.2	-	-	内外面回転ナデ	淡灰色	普通 石英を含む	不良	
-33	a16Gr	須恵器 高台付 坏	-	6.4	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	普通	
15-34	A15Gr	須恵器 高台付 坏	-	8.8	-	内外面回転ナデ	灰色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	普通	
-35	a13Gr	須恵器 坏	12.8	-	-	内外面回転ナデ	暗灰色	密 石英を含む	良好	
-36	a15Gr	須恵器 坏	14.8	-	-	内外面回転ナデ	外/淡灰色 内/暗灰色	密 石英を含む	普通	
-37	a16Gr	須恵器 坏	-	8.6	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	普通	
-38	a15Gr	須恵器 坏	12.7	-	4.9	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	外/緑灰色 (一部灰 褐色) 内/暗灰色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	
-39	A16Gr	須恵器 坏	-	10.0	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	淡灰色	密 石英を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
15-40	A14Gr	須恵器 皿	15.5	14.2	2.85	内外面回転ナデ 底/へら切り?	淡灰色	密 1mm以下の白色 砂粒を含む	普通	
-41	A16Gr	須恵器 平瓶	-	-	-	内外面ナデ	暗灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	普通	
-42	A14Gr	須恵器 高坏	-	11.5	-	内外面回転ナデ	暗灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	透し孔あり
-43	a15Gr	須恵器 高坏	-	-	-	内外面ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	普通	透し孔あり
16-1	A17Gr	弥生土器 壺	26.0	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に2条の凹線文・ 刻目文	淡褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	不良	
-2	A17Gr	弥生土器 甕	22.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハケ	暗褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	不良	外面スス 附着
-3	A17Gr	弥生土器 甕	23.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/横方向ハケ	外/褐色 内/淡褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	外面スス 附着 口縁端部に 3条の凹線 文入る
-4	a17Gr	土師器 甕	23.6	-	-	内外面ナデ	淡褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-5	A17Gr	弥生土器 高坏	18.2	-	-	外/ナデ、4条の凹線文入る 内/横方向ミガキ	外/淡褐色 内/淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母を含 む	普通	口縁端部 に2条の 凹線文入 る
-6	A17Gr	弥生土器 壺or甕	-	7.8	-	外/縦方向ミガキ、一部 ハケ 内/ナデ	外/淡褐色 内/灰褐色	密 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母を含む	普通	
-7	A17Gr	弥生土器 壺or甕	-	6.4	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ	暗褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	内外面に スス附着
-8	A17Gr	弥生土器 壺or甕	-	6.3	-	外/縦方向ミガキ 内/ケズリ	外/橙褐色 内/褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	内外面に スス附着
-9	A17Gr	弥生土器 壺or甕	-	5.5	-	内外面ナデ	褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	外面スス 附着
-10	A17Gr	弥生土器 壺or甕	-	7.9	-	内外面ナデ	外/褐色 内/淡褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	
-11	A17Gr	土師器 甕	25.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	淡褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
16-12	A17Gr	土師器 甕	24.8	-	-	口縁部内外面ナデ、内面 一部にハケ 頸部下内/ケズリ	外/淡橙褐色 内/褐色	普通 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
-13	a17Gr	土師器 甕	22.0	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 1mm大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
-14	A17Gr	土師器 甕	27.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下内/ケズリ	外/橙褐色 内/淡褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
-17	A17Gr	土師器 甕	-	-	-	外/縦方向ハケ 内/ケズリ	外/暗褐色 内/褐色	やや粗い 1~2mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	脚部破片
-18	A17Gr	土師器 甕	-	-	-	外/縦方向ハケ 内/ケズリ	外/褐色 内/淡褐色	やや粗い 1~2mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	脚部破片
-19	A17Gr	須恵器 平瓶	-	-	-	内外面回転ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密	良好	
-20	A17Gr	須恵器 甕or横瓶	21.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下外/タタキ 内/タタキ	灰色	密 石英を含む	良好	
-21	A17Gr	須恵器 高坏	-	11.0	-	内外面回転ナデ	外/淡灰色 内/暗灰色	密 石英を含む	良好	
-22	A17Gr	須恵器 坏身	9.0	-	-	外/回転ナデ、下部ケズリ 内/回転ナデ	灰色	普通 石英を含む	良好	
-23	A17Gr	須恵器 坏蓋	10.2	-	-	内外面回転ナデ	灰色	普通 石英を含む	やや不良	
-24	a17Gr	須恵器 坏蓋	16.2	-	-	内外面回転ナデ	灰色	密 石英を含む	普通	
-25	A17Gr	須恵器 坏蓋	-	-	-	外/回転ナデ、上部ケズリ 内/回転ナデ	外/緑灰色 内/灰色	密 石英を含む	良好	
-26	A17Gr	須恵器 高台付坏	-	12.4	-	内外面回転ナデ 底/ヘラ切り	淡灰色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	普通	
-27	A17Gr	須恵器 高台付皿	19.7	14.8	2.55	内外面回転ナデ	淡灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	普通	
-28	A17Gr	須恵器 高台付坏	14.2	8.4	4.6	内外面回転ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
16-29	a17Gr	須恵器 坏	-	8.9	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	外/暗灰色 内/緑灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	普通	
-30	A17Gr	須恵器 高台付 坏	-	9.9	-	外/ヘラケズリ 内/回転ナデ 底/回転糸切り後、ナデ	灰色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-31	A17Gr	須恵器 高坏	-	10.0	-	内外面回転ナデ	灰色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	2ヶ所に 透し孔あ り
18-1	A18Gr	弥生土器 壺	-	12.0	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ミガキ 内/ナデ	褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	
-2	A18Gr	弥生土器 壺	-	33.4	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に3条の凹線文、 口縁内面に4条の凹線文 が入る	黄褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	
-3	a18Gr	弥生土器 器台	-	-	-	外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	やや不良	外面脚端 部に凹線 文入る
-4	a18Gr	弥生土器 壺	22.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に円形浮文貼付 ける	淡褐色	普通 石英・雲母を含 む	やや不良	
-5	a18Gr	弥生土器 甕	23.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ、 ミガキ 内/ナデ	褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	口縁端部 に2条の 凹線文入 る
-6	a18Gr	弥生土器 甕	27.6	-	-	口縁部内外面ナデ 外面頸部に指頭圧痕文帯 貼付ける	淡褐色	密 石英・雲母を含 む	普通	口縁端部 に2条の 凹線文入 る
-7	A18Gr	古式土師器 甕	25.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	
-8	a18Gr	弥生土器 甕	20.6	-	-	口縁部 外/ナデ 内/ハケ 頸部下 内/ケズリ	淡黄褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	口縁端部 に2条の 凹線文入 る
-9	a18Gr	弥生土器 壺or甕	-	7.9	-	外/縦方向ミガキ、一部 ハケ 内/ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・金 雲母を含む	普通	
-10	a18Gr	弥生土器 壺or甕	-	6.4	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ、一部ミガキ	淡褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	良好	内面スス 附着
-11	a18Gr	弥生土器 壺or甕	-	4.8	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ、一部ハケ	外/橙褐色 内/暗褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	内面スス 附着
-12	a18Gr	弥生土器 壺or甕	-	6.0	-	内外面ナデ	淡褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
18-13	a18Gr	土師器 甕	20.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下内/ケズリ	淡褐色	普通 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-14	A18Gr	土師器 甕	24.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	
-15	A20Gr	土師器 高坏	15.2	-	-	内外面ナデ 外面下方はハケ	黄褐色	普通 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	内外面にスス付着
-16	A18Gr	土師器 甕	-	-	-	外/指頭圧痕残る 内/ケズリ、底部ハケ	黄褐色	やや粗い 1mm大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	底部破片
-17	a18Gr	土師器 坏	-	8.4	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	
-18	A18Gr	須恵器 坏蓋	-	-	-	外/ヘラケズリ 内/回転ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	普通	輪状つまみが付く
-19	A18Gr	須恵器 坏蓋	-	-	-	内外面ナデ	淡灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	普通	宝珠状つまみが付く
-20	a18Gr	土師器 坏	-	5.4	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	密 石英を含む	普通	
-21	A18Gr	須恵器 坏	-	11.8	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	褐灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	やや不良	
-22	a18Gr	須恵器 坏蓋	11.5	-	-	外/回転ナデ、上部ケズリ 内/回転ナデ	外/暗灰色 内/暗青灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	良好	
-23	A18Gr	須恵器 高台付坏	-	7.4	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	良好	
-24	a18Gr	須恵器 高坏	-	-	-	内外面回転ナデ	外/淡灰色 内/灰色	密 1mm大の白色砂粒・石英を含む	良好	
20-1	a19Gr	弥生土器 甕	19.6	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に2条の凹線文が入る	褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-2	a19Gr	弥生土器 甕	21.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下外/縦方向ハケ 内/ナデ	褐色	普通 1mm大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
-3	a19Gr	弥生土器 甕	10.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下外/横方向ハケ 内/横・斜め方向ハケ	外/褐色 内/淡黄褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着 口縁端部に2条の凹線文入る

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
20-4	a19Gr	弥生土器 壺or甕	-	5.0	-	外/縦方向ミガキ、一部 ハケ 内/ナデ	暗褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-5	a19Gr	弥生土器 壺or甕	-	5.6	-	風化著しく不明	淡赤褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	不良	
-6	a19Gr	弥生土器 高坏	20.8	-	-	外/縦方向ミガキ 内/縦方向ミガキ	黒褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	不良	口縁端部 に刻目文・ 山形文
-7	a19Gr	弥生土器 高坏	-	-	-	外/6本単位からなる凹 線文が4段に入る 内/ケズリ	褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	
-8	A19Gr	土師器 甕	16.35	-	13.2	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ハケ・ 内/ケズリ	外/橙褐色 内/橙色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	外面スス 付着
-9	a19Gr	土師器 甕	29.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	外/橙褐色 内/淡褐色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母・金雲母を 含む	普通	
-10	a19Gr	土師器 甕	28.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	外/褐色 内/淡橙褐 色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母を含む	普通	外面スス 付着
-11	A19Gr	土師器 甕	27.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	外面スス 付着
-12	a19Gr	土師器 甕	24.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	外/褐色 内/淡褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	外面スス 付着
-13	a19Gr	土師器 甕	27.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	外/褐色 内/淡褐色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母を含む	普通	外面スス 付着
-14	A19Gr	土師器 甕	21.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-15	a19Gr	土師器 甕	15.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	外/淡褐色 内/褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-16	a19Gr	土師器 甕	23.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	外/淡赤褐 色 内/褐色	普通 1~2mm大の白 色砂粒・石英・ 雲母を含む	やや不良	
-17	A19Gr	須恵器 壺	12.2	-	-	内外面回転ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
-18	a19Gr	須恵器 坏	-	8.2	-	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	暗緑灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
20-19	a19Gr	須恵器 高台付 坏	14.3	8.5	5.5	内外面回転ナデ 底/回転糸切り	外/暗灰色 内/灰色	密 石英を含む	良好	
-20	A19Gr	須恵器 高台付 坏	-	4.2	-	内外面回転ナデ 底/ヘラ切り	灰白色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	不良	
-21	A19Gr	陶器 皿	10.6	-	-	内外面回転ナデ	褐色	密 石英を含む	良好	内面と外面 縁に近い 付色の 黒施 釉
22-1	a20Gr	弥生土器 壺	27.4	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に3条の凹線文 入る	橙褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-2	a20Gr	弥生土器 蓋	5.3	-	5.35	内外面ナデ	褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	
-3	a20Gr	土師器 甕	26.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	
-4	a20Gr	土師器 甕	22.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下外/ナデ、一部ハ ケ 内/ケズリ	淡褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	良好	
-5	a20Gr	土師器 甕	46.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下内/ケズリ	黄褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-6	a20Gr	土師器 甕	37.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下外/ナデ、ハケ 内/ケズリ	外/褐色 内/黄褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	
-7	a20Gr	土師器 坏身	12.6	-	5.0	外/ハケ 内/ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母・金 雲母を含む	良好	内外面朱 塗り
-8	a20Gr	須恵器 坏蓋	13.6	-	4.3	外/下部回転ナデ 上部ヘラケズリ 内/回転ナデ	灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	外面に2条 の沈線入る 外面上部に ヘラ記号あ り
-9	a20Gr	須恵器 高坏	14.1	11.0	10.4	内外面回転ナデ 脚部2ヶ所に透し孔あり	灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	良好	
23-1	第5トレンチ	土師器 甕	18.4	-	-	口縁部内外面ナデ	茶褐色	密 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	普通	搬入品の 可能性あ り
-2	表採	弥生土器 壺or甕	-	4.7	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ	外/橙褐色 内/暗褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	内面スス 付着
-3	表採	土師器 皿	9.6	-	-	内外面回転ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含 む	良好	内外面朱 塗り



挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
23-4	表探	土師器 皿	14.6	9.2	2.8	内外面回転ナデ	淡橙褐色	密 石英を含む	良好	内外面朱塗り
-7	表探	須恵器 坏蓋	9.7	-	-	内外面回転ナデ	外/灰褐色 内/灰色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英を含 む	普通	
-8	表探	土師器 坏身	12.2	-	4.7	内外面ナデ	淡褐色	普通 1mm大の白色砂 粒・石英・雲母 を含む	やや不良	内外面朱 塗り 底部にヘ ラ記号あ り
-9	第5トレンチ	須恵器 甗	10.2	-	-	外/頸部に波状文 体部に刺突文 内/回転ナデ	外/暗灰色 内/灰色	密 1mm大の白色砂 粒・石英を含む	良好	頸部と体 部に凹線 文が入る

## 出土遺物観察表（その他の遺物）

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
10-5	A 1 4 G r S D 0 1	管状土錘	ほぼ完形	土製	4.5	1.6	1.45	11.0	
11-19	A 3 G r	不明	片端欠損	鉄	3.5	1.0	1.0	4.0	
12-14	a 7 G r	管状土錘	完形	土製	5.3	1.8	1.8	13.0	
-23	a 5 G r	不明	完形	鉄	3.6	0.4	0.4	3.0	
-24	a 5 G r	砥石	片端欠損	石英安山岩質 凝灰岩	10.0	6.2	3.5	29.0	
16-15	a 1 7 G r	管状土錘	完形	土製	4.85	2.4	2.4	47.0	
-16	a 1 7 G r	管状土錘	完形	土製	5.9	2.1	2.1	29.0	2度の穿孔あり
18-25	a 1 8 G r	打製石斧	完形	流紋岩	17.5	10.0	2.1	460.0	
22-10	a 1 9 G r	石鋸	両端欠損	不明	4.1	3.0	0.8	—	片端を研磨し刃部を作り出す
23-5	表採	管状土錘	大部分欠損	土製	1.4	1.2	1.2	1.0	
-6	表採	石核	—	黒曜石	2.7	1.75	1.3	8.0	

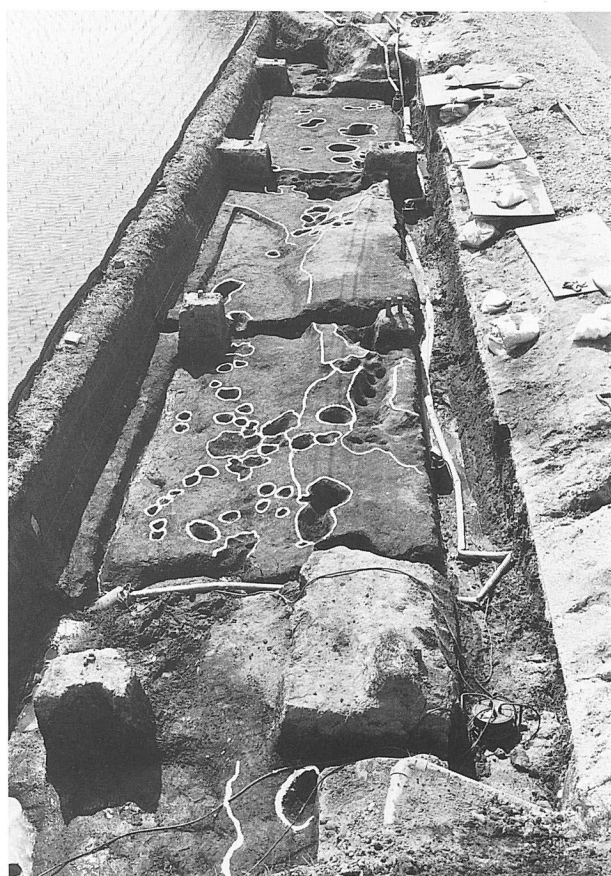
# 圖 版



調査地近景



発掘作業風景



A0Gr~A4Gr 遺構検出状況

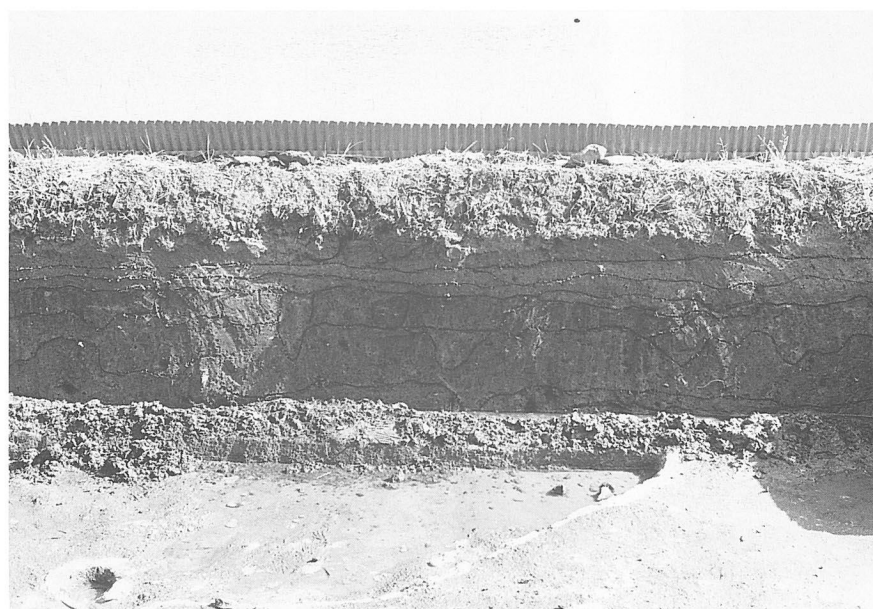
図版 2



S X 0 1 遺物出土状況



A 1 ~ B 1 土層断面



B 2 ~ B 3 土層断面



SD01 遺物出土状況



SD01 検出状況 (西側)



SD01 検出状況 (東側)

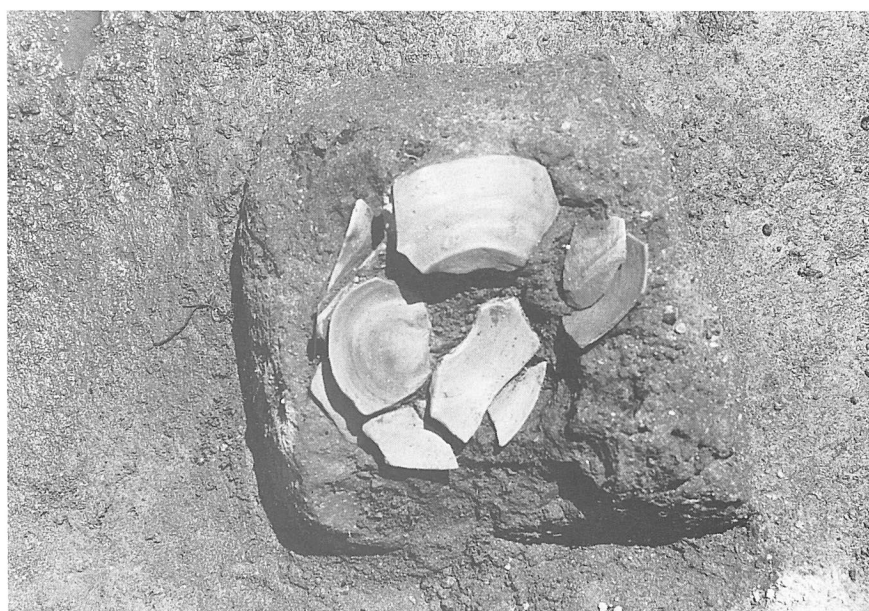
図版 4



S D 0 2 検出状況



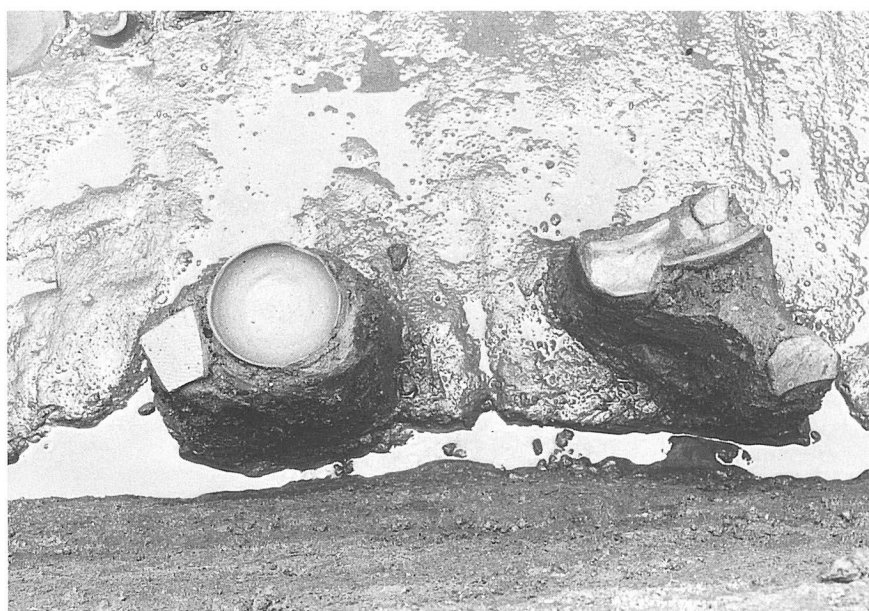
S D 0 2 遺物出土状況



A 4 G r 遺物出土状況



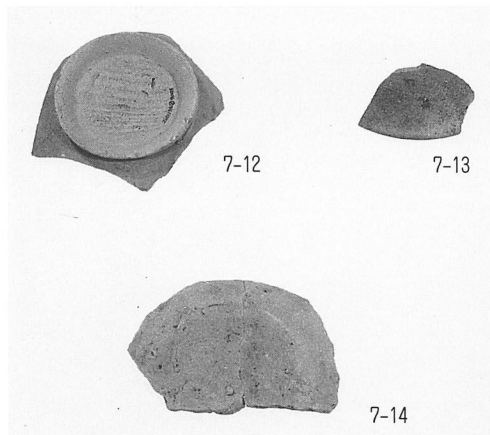
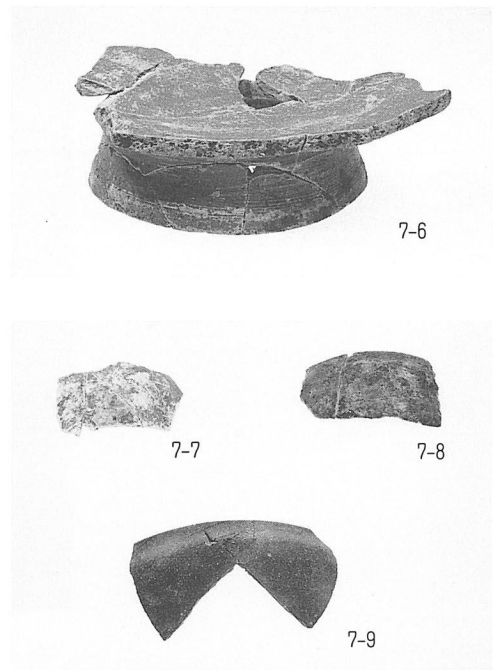
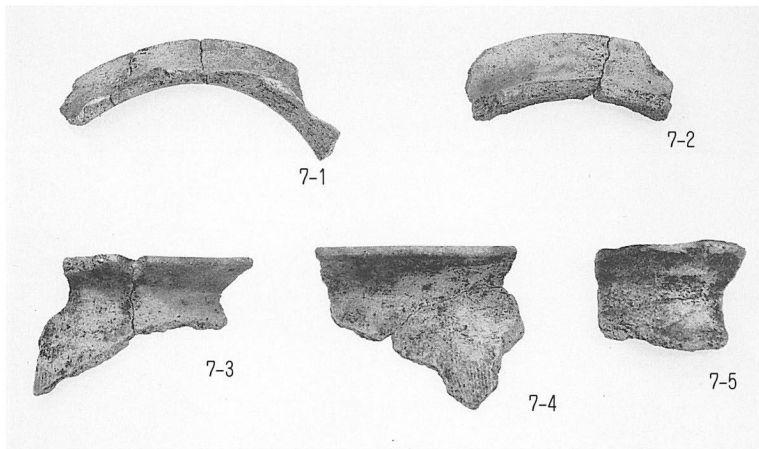
a 1 8 G r 遺物出土状況



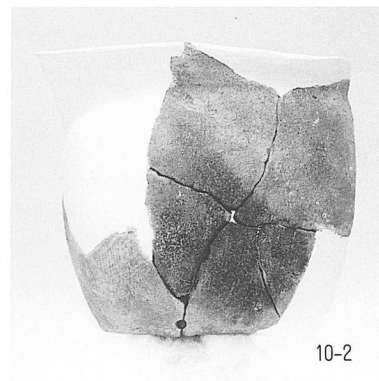
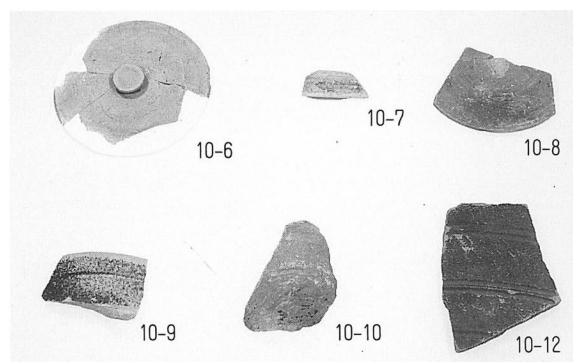
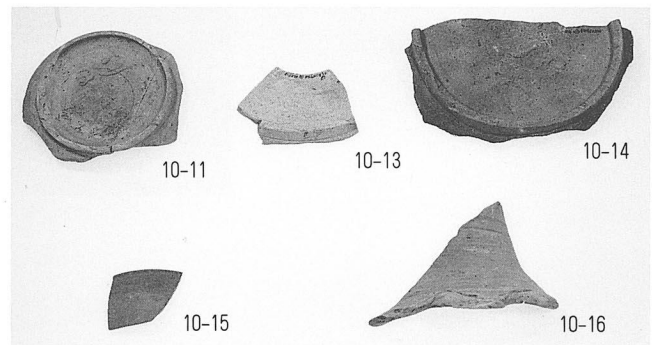
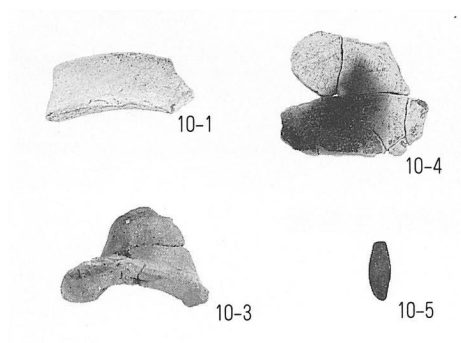
a 2 0 G r 遺物出土状況



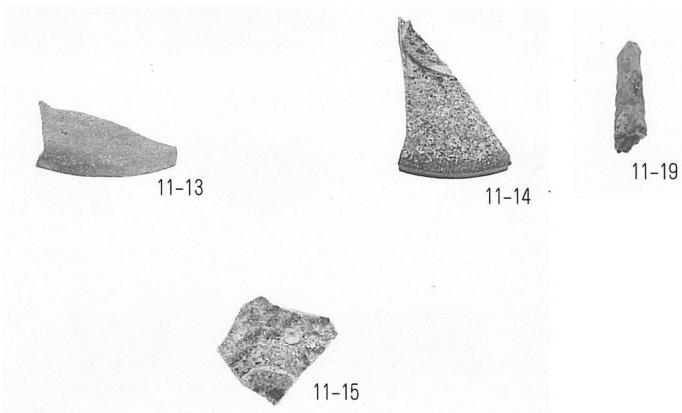
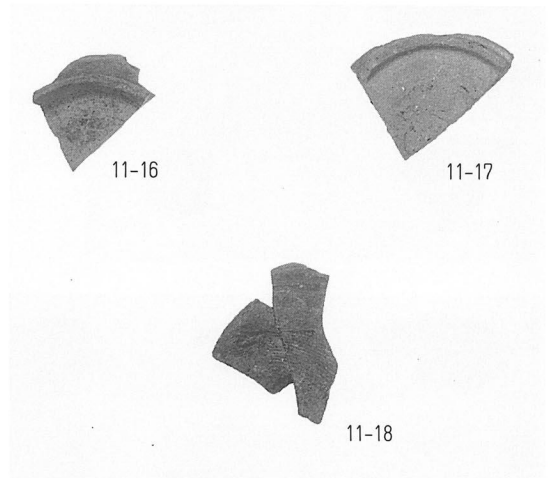
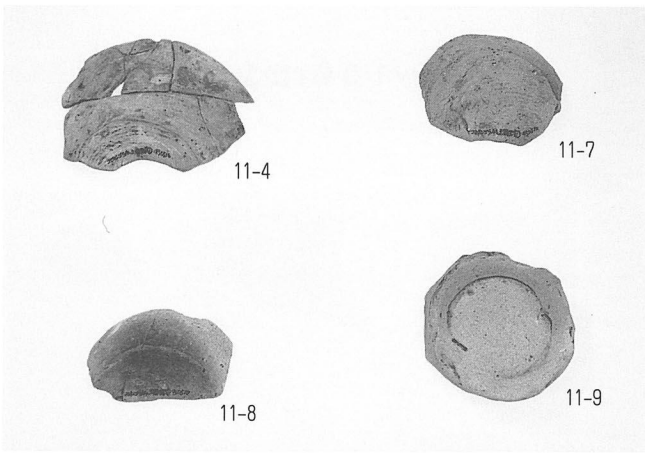
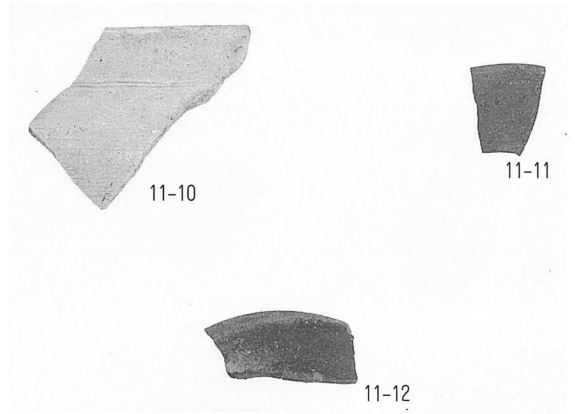
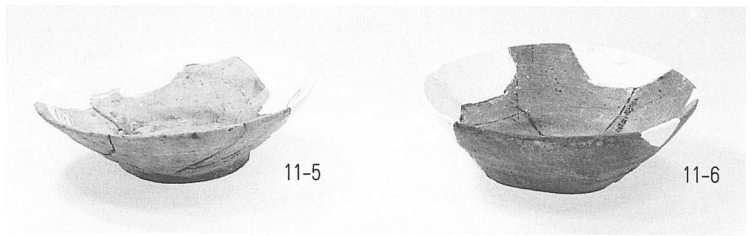
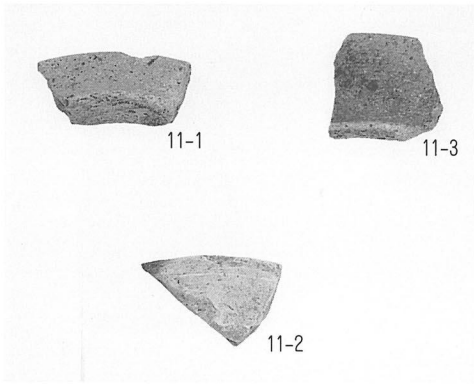
図版 6



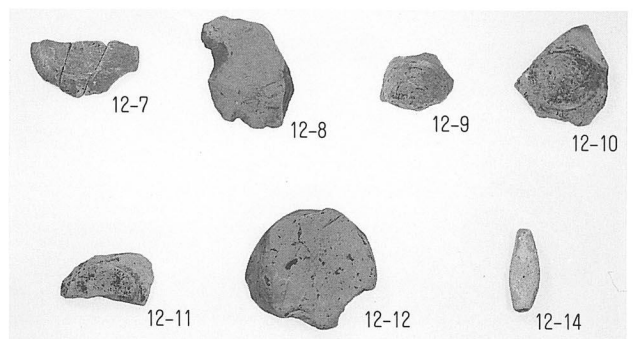
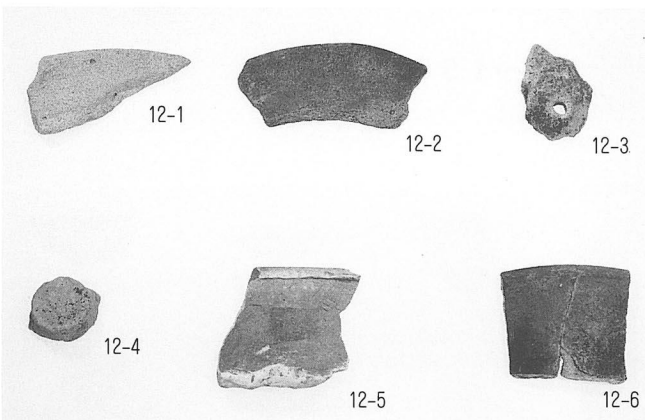
S X 0 1 出土遺物



S D 0 1 出土遺物

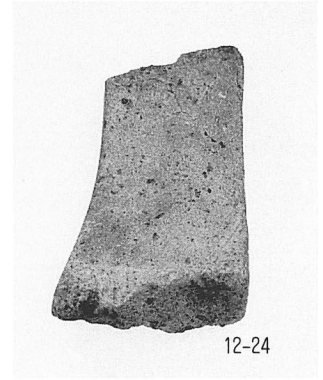
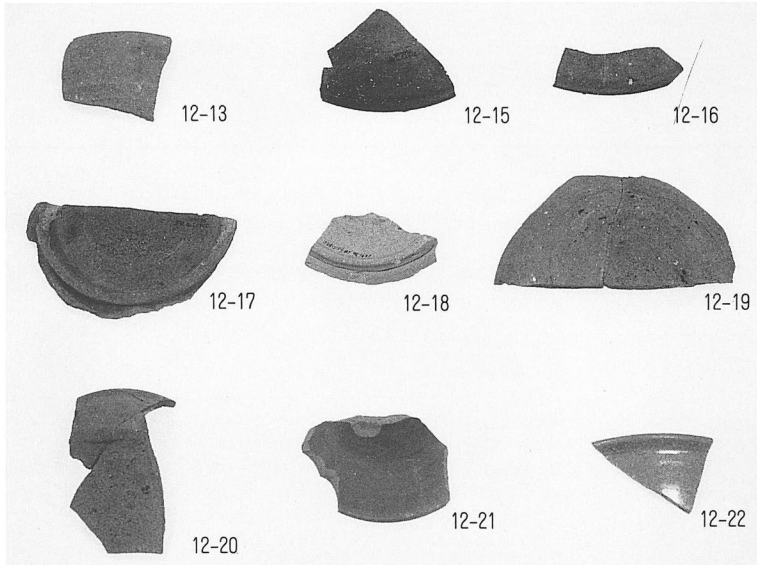


0 ~ 4 Gr 出土遺物

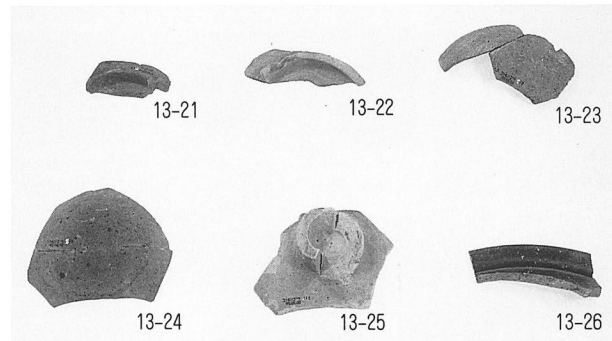
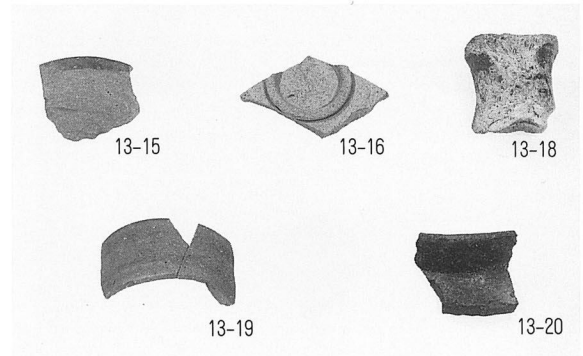
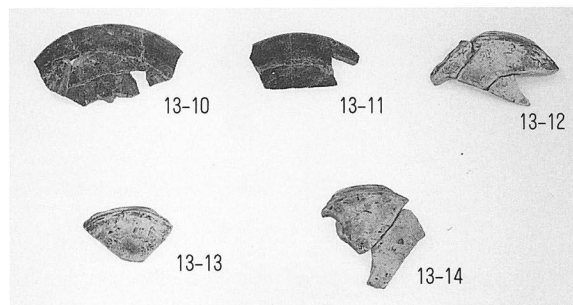
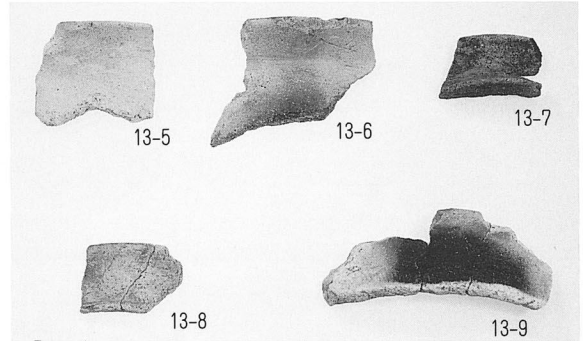
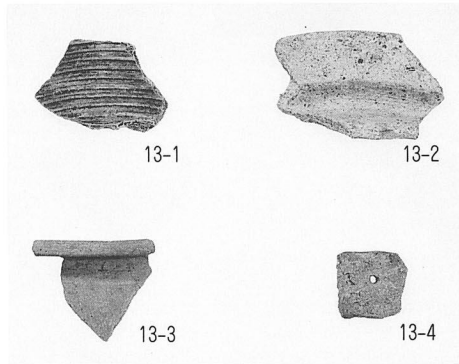


5 ~ 10 Gr 出土遺物

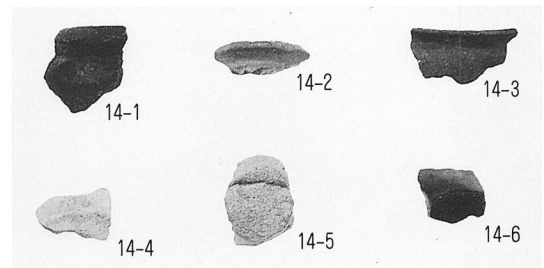
図版 8



5 ~ 10 Gr出土遺物

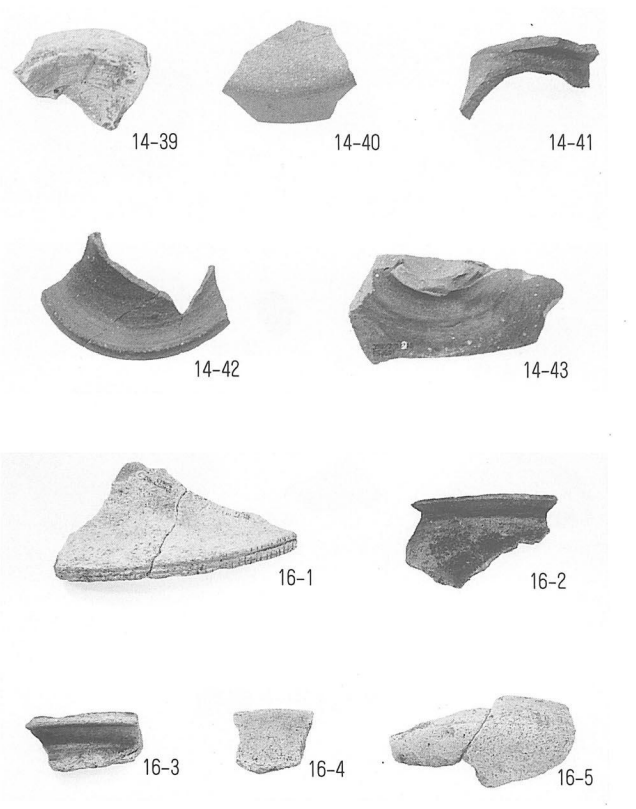
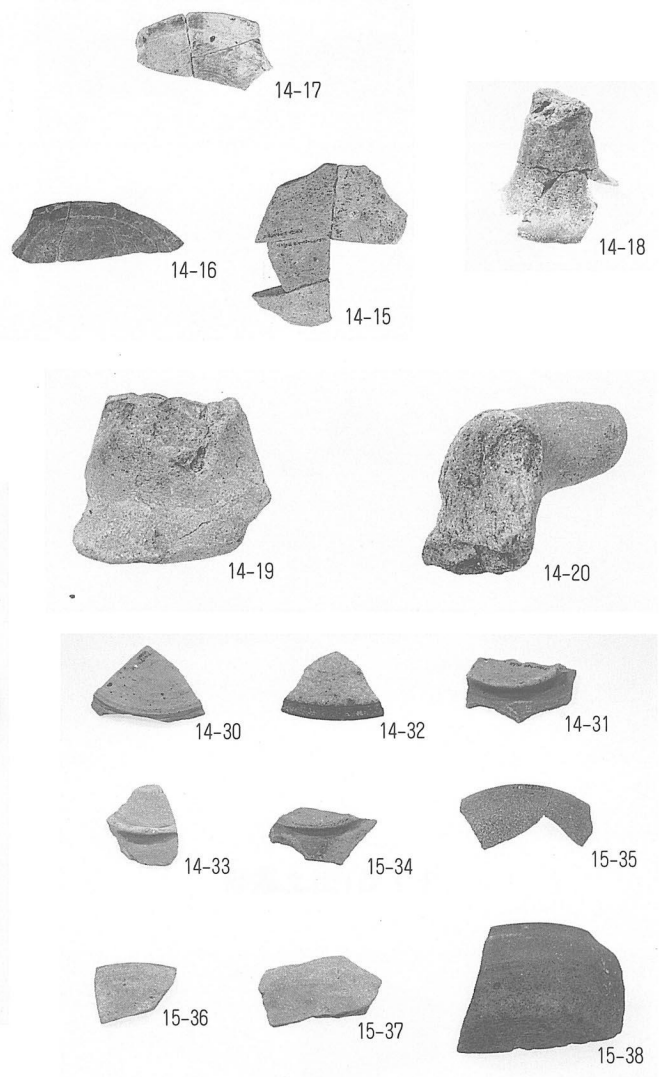
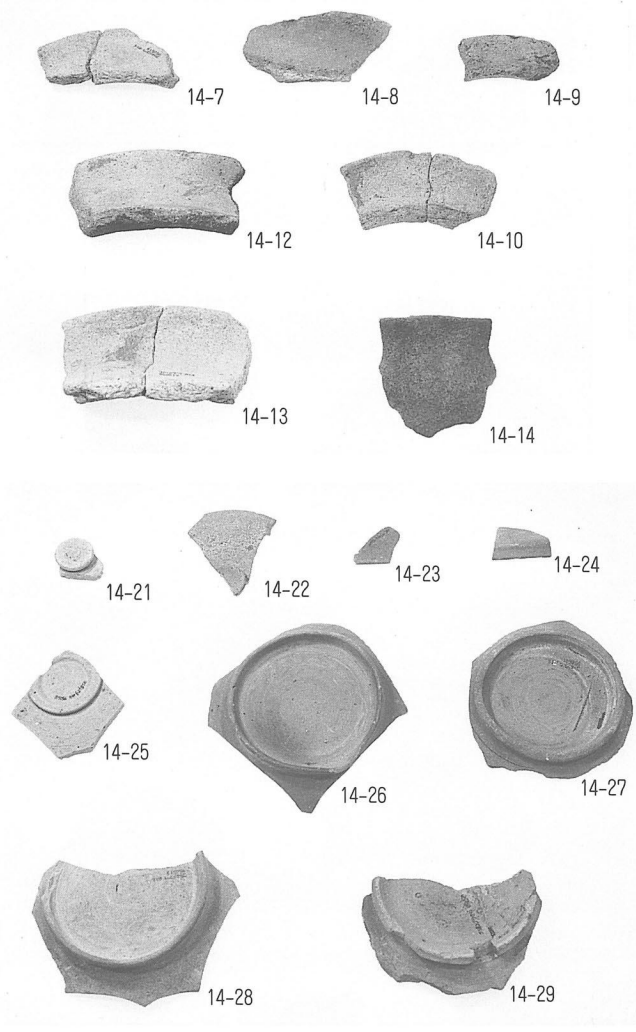


11 ~ 13 Gr出土遺物

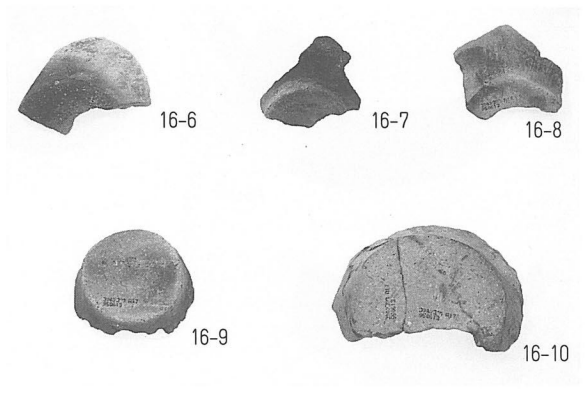


14 ~ 16 Gr出土遺物



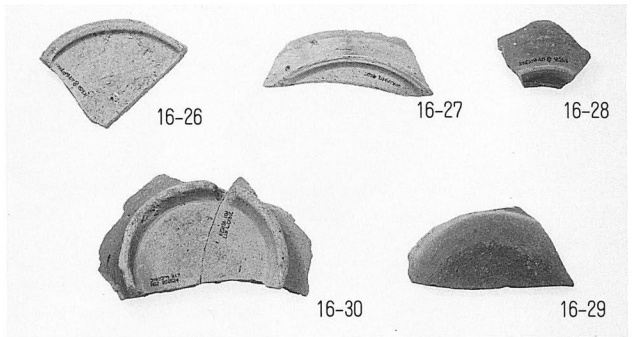
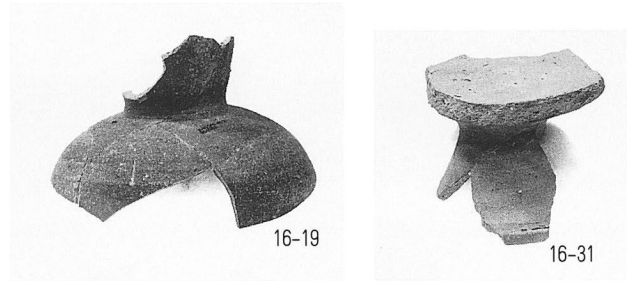
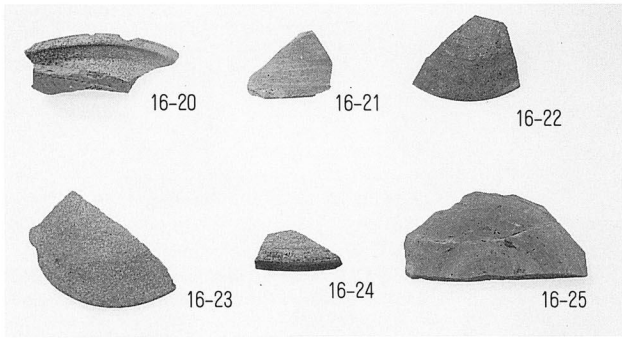
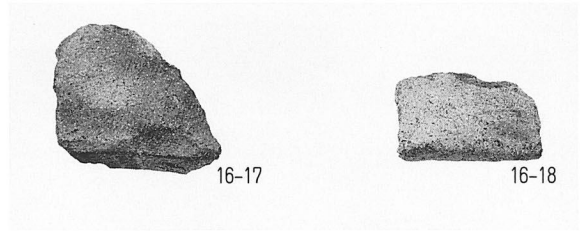
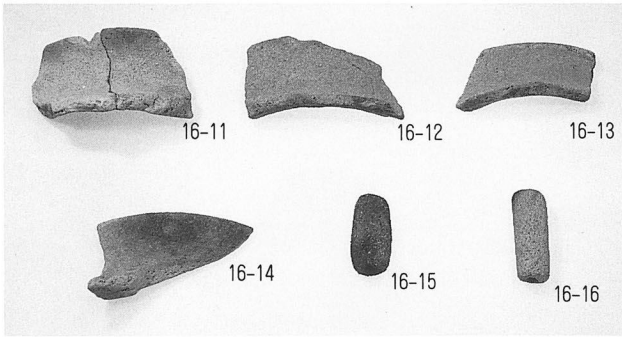


14 ~ 16 Gr 出土遺物

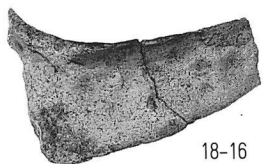
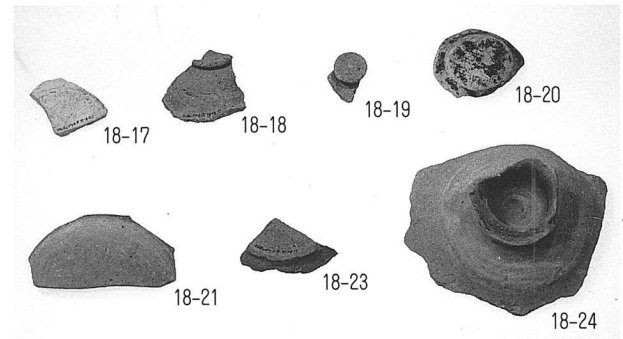
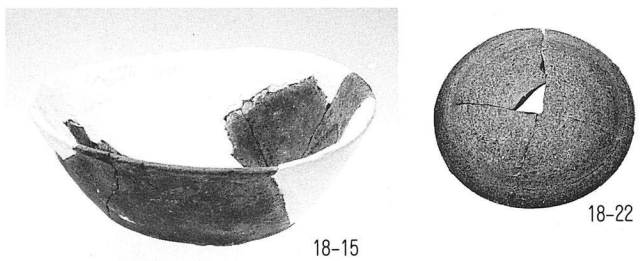
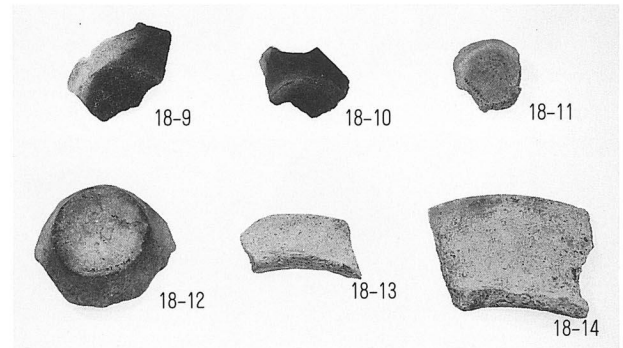
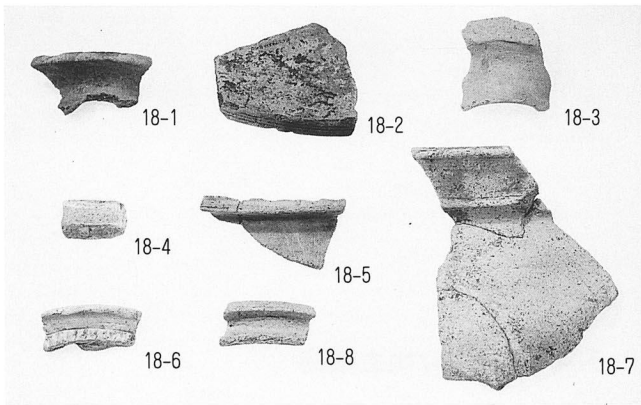


17 Gr 出土遺物

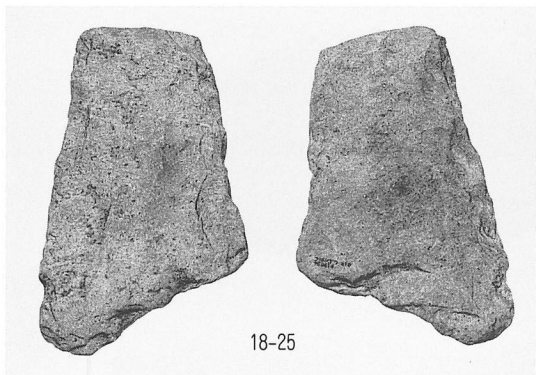
図版10



17 Gr出土遺物



18 Gr出土遺物

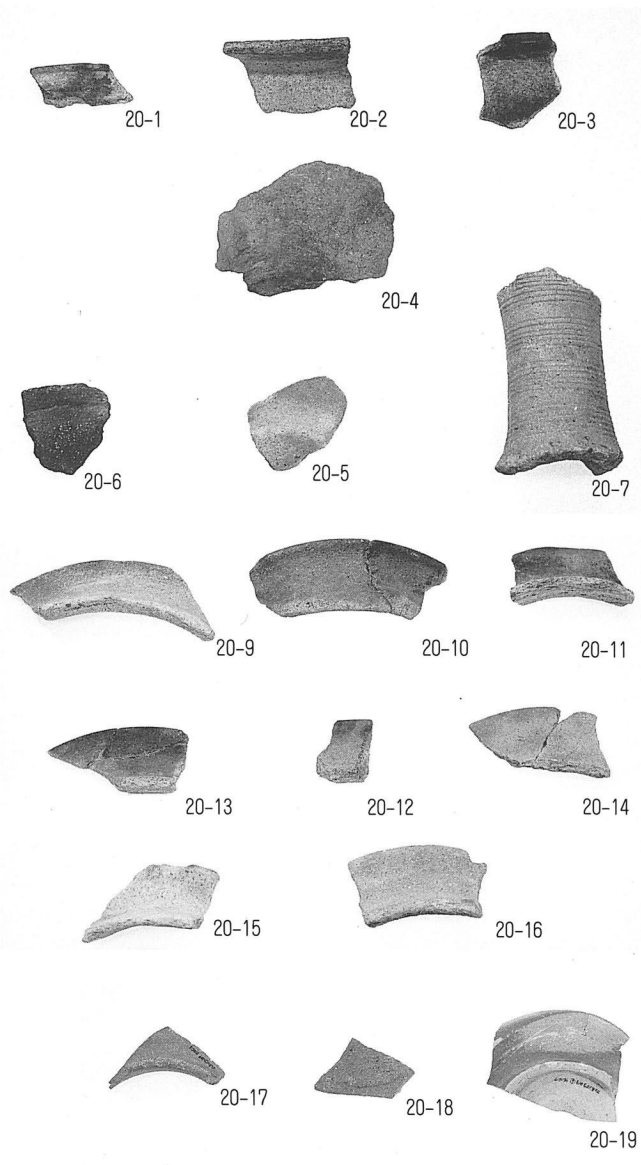


18-25

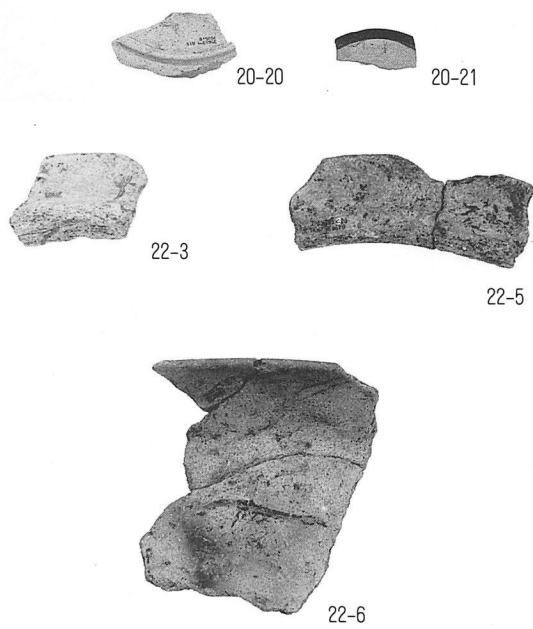
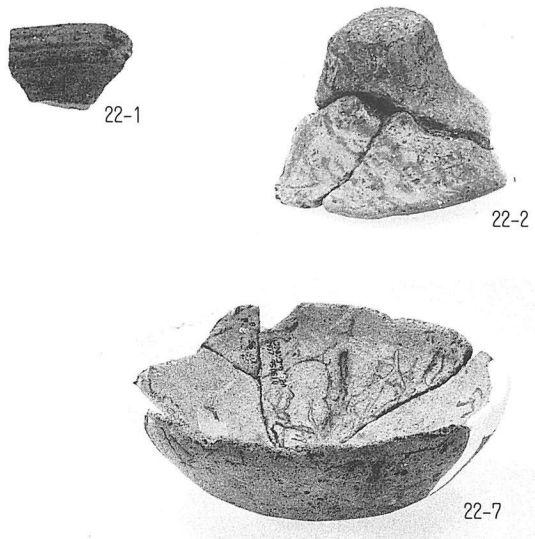
18 Gr出土遺物



20-8



19 Gr出土遺物



20 Gr出土遺物

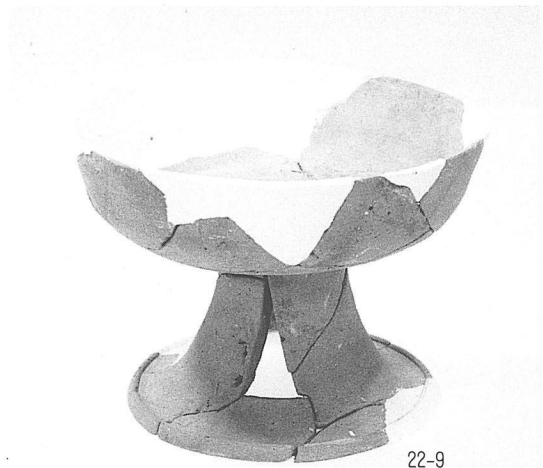
図版12



22-4



22-8



22-9

20Gr出土遺物



23-1



23-2



23-3



23-6



23-4



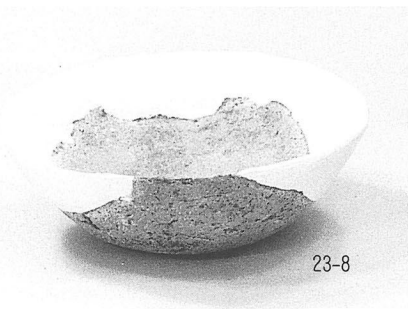
23-5



23-7



23-9



23-8

その他の遺物

古志地区土地改良総合事業地内

## 古志本郷遺跡発掘調査報告書

平成11年（1999）3月発行

編集・発行 出雲市教育委員会  
出雲市今市町109番1

印刷・製本 有限会社 ナガサコ印刷  
出雲市下横町350番地